

---

# News Letter

No.18 2007年7月

---

日本環境工学教授協会  
Japan Association of Environmental Engineering Professors

---

## 目次

大学院修士課程の外部認定制度の動向	1
顧問寄稿	
シニアライフと地域社会	2
辛口論議	6
思い付くままに	8
温室効果ガスの削減にはGDP3%程度の費用がかかる!	10
環境の研究	11
大学・高専ニュース	12
(1)教育研究組織の改組、計画など	
(2)人事	
(3)シンポジウム・講演会など	
(4)国際交流関係の事業など取り組み	
(5)その他のニュース	
事務局からのお知らせ	18
[特集]博士論文・修士論文・卒業論文等テーマ	19

## 大学院修士課程の外部認定制度の動向

東京大学大学院工学系研究科

古米 弘明

科学技術立国を目指す日本としては、高度な技術者を育成する大学院修士課程の教育を国際的にも同等以上もものにすることが求められていることは言うまでもない。従来から、修士課程におけるスクーリングやコースワークの重要性は指摘されて久しいが、実際に体系だってその検討を行っている大学は多くないものと思われる。ある意味では、大学院カリキュラムは旧態依然としており、国際的に同等以上の大学院教育を実施しているかを自己点検することが今まさに求められている。

日本技術者教育認定機構(JABEE)では、学部教育プログラムを対象に2005年度までに125の大学等における281のプログラムを認定しているが、大学院教育プログラムの認定は実施していない。2002年度から、大学院外部評価認証制度に関する調査が実施され、基準委員会大学院分科会や大学院認定推進委員会が設置され検討が進められてきた。そのなかで、下記のような大学院外部評価認証制度が必要な理由、教育機関の利点、および制度の基本方針が整理されている(参照 平成18年度経済産業省受託報告書より抜粋)。

<外部評価認証制度が必要な理由>

- (1)産業界からの強い要望がある。
- (2)学部のみならず大学院教育でも学習成果の保障は教育機関の義務である。
- (3)教育の質の低下を阻止し、向上させるために必要である。
- (4)国際的職業資格を得るために修士プログラムの認定も必要とされている分野があ

る。

- (5)人材の国際的移動、教育の国際化、国際的に活躍できる人材育成等からの必要性が増している。
- (6)中央教育審議会の答申で専門別分野評価の必要性が指摘されている。
- (7)JABEEで審査認定する方が各大学で外部評価を実施するより合理的かつ経済的である。

<教育機関が認定を受ける利点>

- (1)教育機関が社会から評価される。
- (2)学生の就職活動で有利になる。
- (3)学習意識の高い学生を集めるのに役立つ。
- (4)教育の質向上は学生、社会、教育機関にとって大きなメリットである。
- (5)建築などの分野では、国際的職業資格が得やすくなる。
- (6)優れた留学生を集めるのに役立つ。
- (7)日本の学生が外国の大学で学習しやすくなる。
- (8)外国で就職しやすくなる。

<制度の基本方針>

- (1)対象プログラムは2年間の学習を標準とする理工農系修士課程プログラムとする。
- (2)修士課程プログラム認定と学士課程プログラム認定は独立とする。
- (3)分野別要件は特殊な場合を除き設定せず、教育側の自由度を確保する。

そして、2006年10月にはJABEE理事会で大学院修士課程認定基準を承認して、2007年度から本格的に大学院修士課程を対象に認定

制度がスタートしている。そのために、大学院認定実施を行うための大学院委員会が運営委員会のもとに設置された。なお、著者は何の因果が土木学会からの推薦でこの委員を務めている。認定制度や審査・認定方法に関する内容の詳細は、JABEE ホームページに掲載の「日本技術者教育認定基準 修士課程プログラム用 2007 年度版」や「修士課程プログラム用 基準・解説 2007 年度版」をご覧ください。

参考 URL

[http://www.jabee.org/OpenHomePage/accreditation\\_o.htm](http://www.jabee.org/OpenHomePage/accreditation_o.htm)

最後に、認定・審査の考え方のポイントを

簡単に記載します。

<ポイント>

1. 修士 2 年間で、62 単位相当が求められる。  
日本では、30 単位 + 修士論文で対応しているため、修士論文に関わる教育において 32 単位相当が最低期待される。なお、欧米では通常 80 単位程度が要求されている。
2. 1 単位には、45 時間の学習負荷時間が求められる。学習負荷時間は、学部の学習保証時間と異なり、学生が授業を受ける時間以外に学生が自分で学習する全ての時間を含む。そして、標準的な学生が必要とする学習時間である。

---

## 顧問寄稿

### シニアライフと地域社会

NPO 法人水辺楽校福祉ネット西原 理事・事務長  
熊本大学名誉教授  
顧問 中島 重旗

#### シニアライフのはじまり

私は平成 7 年 3 月に熊本大学を 65 才定年退職した。その 4 月から熊本工業大学に再就職して衛生工学、環境工学を教えた。平成 12 年崇城大学に校名変更、平成 15 年 3 月に定年退職、平成 16 年 3 月まで 1 年間講師で授業を続けて教職を辞めた。すでに 75 才を迎え、毎日が日曜日になり、シニアライフを自由にと頭の中では考えた。しかし、実際はなにも確たる目標があるわけではない。

たまたま私の自宅のある町内に白川がある。

阿蘇山を源流にして、黒川と合流する。中流域では堰を造り、台地を耕作地に代えた。加藤清正が造った取水堰は 30 にも及ぶと云われている。都市的な地域を流れ有明海に注ぐ延長 100 km ばかりの荒れ川だ。私の町内は丁度、白川が熊本市都市域に入ったあたりの左岸に沿って、1 km ばかりの町だ。町内で白川の流水域石積護岸の上の家屋 10 数戸はここ 10 数年で移転した。河川敷の無かったところに、約 50m 幅 300m 長さで、町の家屋と同じ高さの河川敷様広場ができた。永い間、こ

ここに在った町内会員の家屋は洪水毎に床下、床上浸水を繰り返していた。幸い平成2年に被災してからは無事である。

## 住民参加のはしり

このような事情で、町内の住民と、将来の河川敷、護岸のあり方について、勉強会を持ちたいと担当の国土交通省から話があった。工事事務所長が大学の後輩であったこと、町内会長が知り合いの小学校校長OBであったこと、私の仕事先が私立大学であったこと、平成10年に「住民参加マニュアル」が環境庁環境政策課を翻約出版したこと等で、連絡や事務関係を引き受けることになった。平成11年に町内に呼びかけて初めて白川水辺に係わる勉強会をスタートした。集まったのは学校の先生OB、公務員OBが主体の20数名であった。とにかく、国交省は、これまで長い間地元住民に何の相談もなく水辺の改修、家屋移転交渉、橋の掛け替えなどを実施してきて、今更何を地元住民と話し合うのか、勉強をするのかとか、連絡担当の私が国交省寄りではないのかと、不信感で渦巻いた。まず、国交省抜きで勉強会を始めた。近い将来、広く長くなる河川敷をどう地元で利用するかの話合い、国交省推薦の川のコンサルタントを入れて、ようやく勉強会がはじまった。長い間に石積み護岸、コンクリート護岸になって、河川敷はあし、よしの雑草で覆われ、小学校区では「川に近づくな」「川は危険」の看板を立て、必死に子どもたちを指導してきた。それを今になって川に近づこう、川に親しもうと川の文化を変えようとする中で、賛成者はお年寄りが多く、昔、川で実際に水遊びをした経験のある住民が主体で、若い人とは総論では賛成しながら、どうしても水辺に近づ

けば安心、安全では一致しないまま勉強会は回を重ねた。新しい河川法で、住民参加、多自然型護岸、沿水樹林の手法が採用された。勉強会で新しい多自然型水辺の資料を見せたり、多自然型護岸を見学したりで、けんけんがくがくで兎に角計画案を纏めた。いくつか問題点はあった。子どもたちが安全に水遊びの出来るワンドを作ってもら。小学校にお願いしてどのような水辺を希望するか絵にもらった。すべて滑り台、ブランコ、トンネルなど遊園地の遊具だけであった。そこで河川敷を急傾斜にして芝生の滑り台を提案した。これはOKだった。河川敷に大口径コンクリートパイプのトンネルを希望したが、これはダメだった。そのつぎに問題は河川敷に植林であった。これは国交省から拒否された。私はダメだと言わないで、検討すると返事して欲しいと申し入れた。長い話し合いの結果、野鳥のために実のなる木、大きく木陰になる木と云うことで、ドングリ、山桃のなる木など10種を10m間隔で堤防の上に植えて貰うことで落ち着いた。次は堤防の高さであるが、2m高さが提示された。堤内地の既存家屋の1階が隠れる高さである。80年確立の洪水溢水防止の高さと説明するが、地元住民は30年確立で良いと主張して譲らない。経験したのは30年に1度の洪水だから高さ1m以下で十分と地元の意見は一致し、取りあえずしぶしぶ国交省は合意した。

3年近い勉強会の結果で、予算が付き、平成14年に入って護岸工事が始まった。ところが、地元住民の移転した跡地の新しい河川敷に古代遺跡群のあることが分かった。遺跡調査が熊本県文化課に委託され、その区分300mの改修工事は延期された。その下流300mの既存コンクリート階段護岸を壊し、ワンド、

急斜面芝生、多自然型護岸、30m×30mの集合広場、10m間隔 10 種植樹の改修工事は平成 14 年 5 月に完成した。

改修工事延期の部分は新南部遺跡群と名づけられ、白川河川敷標高 20mの段丘上、約 2、900 m<sup>2</sup>にあり、平成 16 年 6 月から 12 月まで掘削調査された。7 世紀前半、1400 年前の家の跡が 15 軒確認された。家の中には須恵器、土師器、鉄器などの遺物、竈、柱の穴、踏み固めた地面が見つかった。跡地は埋め戻され、平坦になったが、現在は囲いがされ、草茫茫である。引き続き改修工事をお願いするばかりであるが、平成 19 年に至るも予算の話はない。移転を免れて残った町並みは、前に床下浸水した現河川敷の標高で、堤防も無く白川流水域の石積み護岸の上にある。今年は幸い雨が少ないようだが、異常気象の時代でも心配な毎日だ。

### 地域社会の情報

このように、川と共生で、川に親しむ多自然型水辺の当然の帰結として、地域住民の主体と責任で、水辺河川敷を利用し、維持管理して欲しいと言うのが、國の財政不足時代の要望だ。ワンドや芝生斜面で子どもたちが水辺に近づき易くなったので、従来の「危険個所から子どもを守るキャンペーン」から、取りあえず安心、安全のために地域はどうすべきか従来と違った活動を開始しなければならない。

私自身は長い間、子どもたちの面倒を母親に任せ放しだったし、当地に移転して来た 30 年前は町内の小学生は 100 名以上もいて、若い父親、母親が多かった。ところが、いまでは町内子ども会は 25 世帯 30 名程度、60 才以上老人が 100 名近く、全体で 250 世帯ほどの

町内会で、九州東海大学工学部と付属高校がある。

以上のような経緯で、地域社会に顔を出し始めた。知己はほんの僅か、近所だけでした。定年まで家庭と勤務先大学との通勤、交友だけで生活して来た。国交省のプロジェクトに押され、それも大学の自分の専門範囲と言うこと、第 2 の定年も近いことで引き受けたが、まず、驚いたことが、自分の町内、定年後の地域社会は典型的な少子高齢化社会だった。勉強会への出席者は町内のお年寄りばかりだ。新しく竣工したワンドの河川敷の維持は、散歩道沿いにつつじや花を植えることから始まった。梅雨時の豪雨による洪水で、早速出来上がったばかりのワンドは流下した火山灰、土砂で満杯に埋め尽くされた。雑草刈りにしてもワンドの土砂を排出するにしても、お年寄りだけではどうにもならない。若い世帯もあるが、なかなかボランティアで水辺の清掃に出てくれない。行政がやることとの考えが財政の不足した今でも頭から抜けない。

### NPO 法人と地域社会

地域にある東海大学の学生ボランティアを考慮して、東海大学環境工学の先生に副代表理事をお願いして、老人会の会員 50 名を会員(社員)に NPO 法人「水辺楽校福祉ネット西原」を平成 15 年 10 月に設立した。理事・事務長で私なりに仕切ってやって来た。財源は老人会の年会費の半分 1000 円と助成金、寄付金だ。会員(社員)数は年々減っていくが、新しい定年退職者、団塊の世代が少しずつ加わってきている。ボランティア希望の学生も少しずつ増えてきたが、せっかく慣れたら卒業で、地域社会との交流の考え方や技術の引継ぎがなかなかうまくいかない。今の若者は単属行動

が好きで、群れることが苦手だ。

NPO の活動は今年で5年目に入った。その間、助成金や寄付金で用意できた物品は、倉庫大3基、小1基、刈払機5台、芝刈機3台、メガホーン2台、カナディアンカヌー1艘、その後東海大が5艘備えた。キャンプ用のキャンプテント5張、野外テント2張、ライフジャケット、スローロープ、排砂用ポンプ、発電機、鍬、ショベル、大小スコップ等数多く備えることが出来た。

東海大学の学生、町内の子ども会、老人会が主体で、広大な水辺広場の自主維持管理の雑草刈り、植生、カナディアンカヌーの試乗体験学習、救助訓練、春秋の七草観察、釣り、天体観測、水生生物調査、凧揚げ大会など自然保護、体験学習などを継続して実施している。

一般社会の風潮を反映して、学生と子どものナイトキャンプは保護者の反対でやらせてもらえない。男性、女性と分ければよいのかもしれないが、そこまで迎合できない。結局、デイキャンプだけは実施しているが、男女共生社会と言いながら、いつの間にか情けない世の中になっている。

### 地域社会との係わり

カナディアンカヌーの試乗訓練も小学生参加者10名中7名は乗せてもよいが、残り3名の親は駄目が出る状態だ。ライフジャケットを付け、スローロープを備えてもそれだ。自然に親しむことには賛成だが、親に実体験がないため、少しでも危険の節がある個々の行為に不安で反対する。親のカヌー試乗体験がまず必要だが、なかなか多忙で若い親の参加が少ないのは残念だ。川底に水生生物の棲んでいることを体験した子どもも少ないし、

川水に浸かった衣類がそのままでは臭いことを体験した子どもの親は川の水が汚いと言う。自然の水が水道水のようにでないことが分からない。飲んでもいいけど、飲む必要はない。そのことの理解が自然を体験しないと分からない。なんとなく矛盾を感じながら、みんな、わいわい自然と共生、共感で大雑把にやっている。

平成16年には、国交省、熊本市、熊本市青年会議所、東海大学生サークル・エコネットと「川の里親協定」、「美化協定」を結んだ。これまでに、共同で水辺に「あずまや」と藤棚、カヌーの木製進水路、流木利用ベンチ、掲示板などを作った。

最下流の流水に浸からない河川敷はグランドゴルフ場に利用している。自前の雑草刈りが必要だが、好きなお年寄りが集まって、とにかく楽しんでやっているし、清掃もできるので一石二鳥だ。

私にとって、このグランドゴルフが唯一のスポーツで、これが元気の源だ。

私のシニアライフは水辺の自然保護、環境学習、釣り、カヌーのスポーツ体験学習でお年寄りと青少年の地域交流の場づくり、川の指導員養成の手伝い、お年寄りの生き甲斐、コミュニティの活性化、まちづくりで地域社会との共生だ。

長い間、環境のこと、川のこと、衛生工学を専門に教えて来た積もりだったが、地域社会では川は、水辺は危険な場所、近づいてはいけない場所、川の自然の水は汚いとしてきた文化が染み込んでいることを強く感じた。

日常的に暇が多いので、丁寧に昨今のマスコミ報道を見聞しているが、知るに絶えない事件の多いこと、気象の異変、その上、政治の出鱈目、嘆いてみても詮無いことだ。達観

している訳ではないが、せめても、川や水は人間、生物の原点で、水辺に親しむことで感性、優しさが養われ、川に親しむ文化、共生を取り戻し、和やかな世相になるように、相

当な努力が必要と感じつつもやっている。私なりの地域社会に還元するシニアライフの一端を述べて見た。

以上

## 辛口論議

山口大学名誉教授  
顧問 中西 弘

最近、原稿を書く機会も少なくなったので、ニュースレターへの寄稿依頼を受けたときいささか戸惑った。何を書こうかと思案の結果、以下の辛口の論評を記述ことにした。この内容は、以前に各誌で披露したものであるが、誰も聞く耳をもたない。しかし、反論も聞かない。完全に無視されているので、近頃は発言しないことにしている。

### 1. 問題解決型の研究を

昨年は農水省の依頼により、有明海の裁判に関与するはめとなった。2000年のノリ不作を契機に有明海の再生が大きな社会問題となり、国も有明海の研究に力を注ぐようになった。我々も有明海問題に関心を持ち、この3年間独自の研究を手弁当で進めてきた。この成果を「有明海の高度な栄養塩管理」として披露したのが、この裁判での証言内容である。

有明海の研究には、国、県、大学等からの多くの研究機関や研究者が参加しており、それぞれの研究グループの成果が纏まりつつある。内容も多岐に渡り豊富になった。個々の研究内容は立派であり、それぞれの専門的な立場からの報告書や学術論文として纏められている。しかしそれらは、有明海問題の解決

という視点からみれば、なお道遠しである。個々の研究は立派なものであっても、全体像がいまひとつ見えてこない。すなわち、各分野の論文の寄せ集めただけでは、問題解決には繋がらない。

一般に研究は、各専門分野で細分化されている。各分野での研究は、間口を狭くして内容を深く掘り下げ、また完璧性を求めることによって、完成度の高いオリジナル研究としての高い評価を受けている。学会での評価も高い。すなわち、研究の本質は原理の追及であり、問題の解決には馴染みにくい。個々の研究の下からの積み上げ、すなわち、ボトムアップの積み上げ方式では問題の解決にはなかなか到達しない。極端なことを言えば、いくら学会誌でいくら論文を積み上げても、それは問題の解決にまでには至らない。しかも皮肉なことには、研究者生命としての業績評価は学会誌への投稿数の多寡に左右されている。すなわち、研究業績と問題解決との関係は希薄である。しかも、問題の解決は研究費の打ち切りを意味するので、それは好まれない。すなわち、問題が解決してしまっただけでは、かえって困るのである。

問題の解決には、研究視点の転換が必要で

ある。それは原理追及型ではなく、**問題解決型の研究手法**である。まずは全体像と問題点を明らかにして、それに最も近い事象の研究から進める。すなわち、トップダウンの垂直降下方式の研究手法の採用である。有明海の研究において、我々は可能な限り、この手法に従った。しかしこの手法は、原理追求型で完璧性を求める学会論文スタイルには馴染まない。なぜならば、全体を総括的にみているので、個々の課題についてのつめが甘い、完成度が低い、検証が不十分等々・・・我々は**学術論文になじまない論文に価値**を求めている。そうして全体的に整合性がとれ、定量的に見通せる研究の必要性を痛切に感じている。このことが現役世代の研究者の参考になれば幸いである。

## 2. 省エネ型の水道と下水道、21世紀の課題

本論は、地球の資源、エネルギー、環境の将来を見越した持続可能なライフスタイルに基づく省エネルギー・省資源型の水道・下水道のあり方を論じたものである。

現在の水道・下水道システムは、基本的に大量生産・大量消費型のライフスタイルに基づく水道・下水道であり、「大量の生活用水を使い、大量の水を汚し、大量の水をきれいにする」システムであり、エネルギー多消費構造のシステムである。

新しい水道・下水道は、「**水を汚さないこと**」を基調として構成されねばならない。水道用水の殆どは洗浄用水であり、水道事業者は、その洗浄用水が水質汚濁の発生源であり、その原因の水を供給しているという意識とその責任の重さを十分に認識していなければならない。また下水道は、単に汚れた水をきれいにするという受身の立場ではなく、**水を汚さ**

**ない視点からの積極的な施設**でなければならない。

安全な飲料水質を担保している**水道**は、生活用水を供給する施設であり、その用途の大部分は**洗浄用水**であるという現実を直視しなければ、新水道論は成り立たない。**洗浄用水**は本質的に、**汚水の発生源**である。また、**安全な飲料水の供給システム**は既に**多様化**している。この現実を無視して、何が何でも多量の洗浄用水まで安全な飲料水のレベルに引き上げなければならないという従来からの発想に固執する限り、大量エネルギー消費型の水道システムからの脱却はない。

本来、**下水道**は汚水や雨水の排除システムであり、水系処理系であって、**本質的に水質汚濁型の施設**である。何でも汚水を受け入れ、どんどん下流に排出した結果、既に19世紀から水質汚濁問題が発生した。この欠点を補うために下水処理が重視されてきた。金とエネルギーをかけさえすれば、下水は限りなく浄化できるレベルにまでに処理技術は発達している。今や下水道は水質保全施設として認知され、市民権を得ている。しかし、その延長上での下水道システムは果たして良いだろうか。それは大量エネルギー消費型の下水道でしかない。私のいう下水道論は、「なんでも受け入れ下水道」ではなく、「**いたわり下**

**水道論**」である。何でも汚物を下水道に受け入れ、金とエネルギーをかけて処理するのではなく、まず可能なかぎり、**水質汚濁物質を下水道に入れないこと**から、下水道は**スタート**しなければならない。

また下水道では、流入した汚水を完全に処理をするという発想ばかりではなく、下水道が**パイプ**を持ち、**下水道の放流先が自由に選定**できるという特長を生かすべきである。下



水道によって、栄養塩類を適正な水域に配分することが可能である。我々の試算では、現に東京湾に流入している下水道放流水を、下水道のパイプを延長して外洋(湾外)に放流することにより、東京湾の環境基準は飛躍的に改善され、しかも、外洋の水質には殆ど影響しないという結果となった。(東京湾ベルト下水道構想)

ここに述べた省エネ型の水道論と下水道論が、当事者にとって歓迎されない最大の理由は、現行システムの水道や下水道の事業縮小を意味するからであろう。発想を転換して、既存概念を破壊し、水道と下水道を再構築することによって新しい発展と展開が開ける。

(なお、この省エネ型の水道論と下水道論は、3章に述べる画期的のエネルギー獲得枠と利用効率の向上を前提としていない。画期的なエネルギーの利用枠の増大が可能となれば、省エネ型の水道論と下水道論も再検討しなければならない。そのような夢の実現を望む者であるか、果たしてできるだろうか。)

### 3. 真の持続可能な社会の形成とは

地球温暖化防止に向けて、大量の化石燃料の削減が叫ばれている。しかし、地球の資源やエネルギーの消費量は、基本的に「1人あたりの消費量(原単位)×人口」で決まるので、たとえ先進国の消費量の原単位を現状の1/

2に削減できたとしても、世界人口の増加やライフスタイルの向上により、途上国の原単位が上がっているため、幾ら試算をしても、明るいシナリオは描けてこない。

真の持続可能な社会の形成には、**物づくりをしなくても食べていける社会経済システムの構築**が不可欠である。この受け皿がなければ、Reduceは夢のまた夢であり、現行の社会システムでは、僅かにRecycleが機能しているだけである。

現代社会の繁栄を維持し、途上国の向上を視野に入れた持続可能な社会の形成には、**エネルギーの獲得とその利用効率の枠を広げる画期的な技術開発**に待たねばならない。それは、自然エネルギーや原子力エネルギー獲得枠を広げる技術(A)と獲得したエネルギーの利用効率向上の技術(B)であり、このAとBの積が、現在の化石燃料を主体としているエネルギー獲得と利用効率を大きく上回れば可能となろう。自然エネルギーは無限であり、原子力燃料も増殖炉や核融合炉が開発できれば、その利用量は飛躍的に増大する。私はこのAとBを善玉技術と呼んでいる。

この**善玉技術(A×B)の画期的な技術向上による増大こそが**、真の持続可能な社会形成に**不可欠**と考えている。このことが可能にならない限り、現在社会の繁栄の未来はない。

## 思い付くままに

東京都立大学名誉教授  
顧問 川口 士朗

アデライドに三つある大学で、南オースト

リア大学が一番新しい。30年来の友人の

ディビッド・リーは、ここの第一号の名誉教授になった。専門は離散数学で、現在でも博士課程の学生のアドバイザーをしている。ディビッドの学生時代の教授、アメリカ人だったか、オーストラリア人だったか、フランスはパリに行き、フランス語で講義をした。講義が終わったら、フランス人の学生が待っていたように質問した。今のは英語かと。だからシロウ、私の名前、外国で話をする時、言葉に余り心配することはないと、英会話に不得意の私を勇気づけたことがある。

サミュエル・ジョンソンはパリに行き、誰と会っても、ラテン語で話した。相手にはまるっきり通じなかった。17世紀頃、学者連はラテン語を共通語に使ったから、外国に出ることがなかったジョンソンは、18世紀末にはもはや学者間の日常語でなくなったことを知らなかったのである。

相手の話が分らないと、私は分るまで聞きかえす。しまいには相手はあきれて、紙に書いてくれるから、筆談になる。しかし分らないでおくよりは精神衛生によい。これまた30年来の友人、冶金学のイアンは、私と会うと今でも紙とボールペンをポケットから取り出す。この頃は話が分るから、私はイアンの優越感から来る楽しみを奪ってしまった。

本を読んで分らなくなると、また始めから読みなおすか、同じことをやさしく書いた別の本を読む。それでも分らないと、もっとやさしい本を読む。同じような本が殖えて、家内に言わせると、何でそんなに本を買うのだということになる。どうもホントには分っていないくせに、もっともらしい本を作る手合が世界中に居るようである。直観的には分る数学の定理の証明は、案外厄介なことになる。例えば、空集合なるものがあつたとしたら、

それは唯一個という定理の証明には、人を食った理屈を使う。この証明は、インド系の在米解析数学者、ジュガンディの書いた本にある。

マルティン・ハイデッガーは、ドイツ語の単語の意味を極限までしぼりこんで、文章を構成したから、読んでも分らない人は、言葉遊びをしていると、悪口をいう。存在と時間を書いた頃のマールブルク大学での講義録、現象学の基本問題は、私には少しは分るから、おもしろい本だと思う。もっともドイツ語は読めないから、英訳である。英訳者のアルバート・ホッフスタッター先生はかなりてこずったらしく、勤務していた大学を退職し、これに専念したと、序文で言っている。大学をやめる余裕があつたらしい。うらやましい。

神は存在するという場合の存在するという動詞は、現実に対応する中身のある述語ではない。このカントの言分は、スコラ哲学の伝統に乗っている。ドイツ語にしる、英語にしる、多少はラテン語に近縁だから、カントあるいはハイデッガーを解説する段になると、まったく無縁の日本語でやるよりは便利である。

戦前ドイツで学位を取るには、広い学殖が求められた。哲学で学位を取るには、もう一つの分野、例えば数学の論文を書かなければならなかった。だからショーペンハウアーも、ハイデッガーも数学には強かった。

ショーペンハウアーは博覧強記の人で、多くの言語に通じていた。毎晩ラテン語訳のウパニシャッドを数ページ読んでから就寝したそう。インド哲学を知るには、ショーペンハウアーを読んだらよいと私は思っている。この衣鉢を継いだハイデッガーを読むと、色即是空の意味がよく分つて来る。さつたな

どと、野狐禅的な言辞を弄する輩の書いた本を読むのは、時間の浪費である。

人はそれぞれに好きなことをして生きているのだから、私の生き方を若い人に押しつけ

るのは、昔から好まない。しかし私と同じようなタイプの人々と話すのは楽しい。そういう人にはめったに出くわさないから、それが残念である。

## 温室効果ガスの削減には GDP3%程度の費用がかかる！

顧問 須藤 隆一

5月4日、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）第3作業部会の報告書がバンコクにおいて公表された。

それによると、温室効果ガスの排出量は産業革命以降増え続けており、1970年から2004年の間に70%増加している。現状のままいくと、温室効果ガスの排出量は次の10数年も引き続き増加する。そのために、短中期はもちろん長期的な緩和対策が必要である。2030年を見通した削減可能量は、予測される世界の排出量の伸び率を相殺し、さらに現在の排出量以下に削減できる可能性がある。費用がCO<sub>2</sub>1トンあたり20米ドルの場合は、年90~170億トン削減できる。CO<sub>2</sub>1トンあたり100米ドルの場合は年160~310億トンと見積もられている。エネルギー需要を満たすためには、エネルギー供給を増加させるよりもエネルギー利用効率の向上に投資する方が費用対効果大きい。再生可能エネルギーによる電力はCO<sub>2</sub>1トンあたり50米ドルの投資は2030年の電力量の30~35%のシェアを占める可能性がある。自動車の燃費向上は少なくとも小型自動車では対策を講じた方がコスト面で有利になる。しかし消費者の自動車購入の判

断基準は燃料だけではないため、必ずしも排出削減に結びつかない。建築物の省エネ対策は、2030年の排出量の30%削減可能である。産業も削減できるが、緩和対策が十分利用されていない。農業は低コストで大きな貢献が可能である。林業も低コストで、排出量の削減および吸収源の増加の両方に大きく貢献できる。CO<sub>2</sub>1トンあたり100米ドルの場合、緩和可能量の約65%が熱帯にあり、また、約50%が森林減少の抑制と劣化の防止により達成可能である。廃棄物は温室効果ガス排出量の占める割合は小さいものの、低コストでの削減が可能である。

今後20~30年間の緩和努力によって、回避することのできる長期的な地球の平均気温の上昇と気候変動の大きさがおおむね決定される。2050年において温室効果ガスを450~650ppmCO<sub>2</sub>の間で安定化させた場合、世界経済は平均でGDP1%の増加から5.5%の損失になる。温室効果ガスのピークが低いほど影響が少ないわけであるが、その場合はピーク後の減少を早期に実現させる必要がある。本報告書は国際社会が目指す目標と費用のメニューが示されたことになるが、わが国は2050年で

50%以上を目指した低炭素社会の構築に向けてイニシアチブをとるべきである。いずれにしてもわれわれは、CO<sub>2</sub>1 トン削減するのに数千円~1 万円程度の費用がかかることを知ることが大切である。

このような莫大な財源は現状の一般の予算から捻出すことは無理があり、新たな環境税(炭素税)をはじめとした経済的措置を速やかに取り入れることが必要である。

## 環境の研究

北九州市立大学大学院国際環境工学研究科 教授  
九州大学工学研究院環境都市部門 特任教授  
顧問 楠田 哲也

「環境学が栄えて環境が減じる」という言葉を初めて聞いたのはもう 30 数年前のことである。確か、末石富太郎先生(大阪大学名誉教授・元京都大学教授)からであったと記憶する。

科学の社会に対する貢献や責任を考えると、この言葉の意味するところは深い。科学の役割は最終的に人々の人生の満足度を高めることにある。科学が社会に果たすべき貢献と責任を科学者自らが認識しておく必要があるし、科学の評価も学問的な難易度だけではなく、社会に対する貢献と責任から視る必要もある。科学の一翼を担う研究が、人類共有の資産である「知」を増やす基礎研究と、生活や活動に何らかの「効用」をもたらす応用研究とに分けられるとするならば、基礎研究ではこの視点から判断することは、価値観や効用が生まれる時間の長さを考慮すると、容易とはいえないが、応用研究では相対的に易しい。

環境研究は生命科学研究と並んで社会に対する貢献と責任が特に大きい分野である。これらの分野は、また、応用研究の成果が人の

倫理にまで直接及ぶという自然科学から社会科学へのフィードバックを作りだすことが少なくない。このことは、環境技術が人の営為の限界を変えうることや生命科学における遺伝子操作をみれば明らかである。さらに、社会を細分化して貢献と責任の対象とすると、短期的部分最適解が全体社会に対する最適解に反することがしばしば生じる領域でもある。紙面の都合で割愛するが、この矛盾の解決には研究成果の影響領域をきわめて広く取り、各要素をシステムとして構築し判断していくしかない。地域環境としての生活の快適化や利便性の向上と地球環境負荷の増加の相反を見るだけでも明らかである。

大学などの研究機関で行われる応用的な環境研究はほとんどが部分領域研究であり、社会にて利用される際の社会に対する貢献や責任までを踏まえてなされているものは、残念ながら、多くないし、学術に関わる社会がそれを容認しているところもある。このような状況は今に始まったものではない。このような態様を打破するために 1970 年代に末石教授が土木学会に環境システム委員会の母体を

設立し、この問題に切り込んでいかれた。その結果、環境システムの研究は進展したが、残念ながら環境システムの発想を科学に対して普遍的に求めるには、未だいたっていない。環境研究領域では、この矛盾を解決、ないしは低減させるために議論を早くから尽くし、環境学、特に環境工学のディシプリンを確立しておくべきであった。遅いとはいえ、今からでも遅すぎるわけではない。日本環境工学教授協会が、この議論の最適の場の一つであることは間違いない。残念ながら、俯瞰型環境研究がほとんど実施されていない状況から見て、この役割を現在の大学などに期待することは至難の業で、現状を考えると、かえってディシプリン確立への道は遠のきつつあるように見える。

たとえば、昨今の「国立」大学では、ポイント制による学科教員の人件費の一律的な削減、それが生み出す昇任機会の減少、勤務の短期評価の強化と長期評価の低下、教育・研究以外の用務の増大、教員の手元に届く研究費や運営費の減少、社会貢献への要請の一層の強化等が起こっている。このような状況下では、長期間を要する重みと価値のある研究課題を選択することが容易でなくなり、論文化しやすい短期に結論がでる課題の選択が多

くなり、そこには、社会への貢献や責任、人類共有財の「知」の蓄積の推進など根幹的なものは失せてしまい、論文数とインパクトファクターを指標とする無機的な世界が登場し、学問の真の姿を具現化させる行為は稀有な存在になってしまいつつある。もっと日常的な見方をすると、環境問題の解決には、環境データベースの整備、大規模長期環境観測・分析、要素研究の他要素への波及効果の検討、要素研究をまとめてシステム化する作業、住民との意見交換、行政担当者への問題の本質の説明など、論文数に寄与しない作業が大量に必要とされることが少なくない。しかし、このような作業に時間を割く余裕はなくなっている。

このような状況の中で、今後、環境工学はいかなるディシプリンを持ってどこに向かっているのか、環境工学の存在理由を如何に位置づけるのか、環境問題解決に欠かせないシステムとしてのとりまとめを担当できる人材を如何に育成するのか、また、現在教育ビジネスとして経営面だけが重視されている「大学改革」を如何に「改革する」かなど、本質に迫らなければならない重い課題が山積している。

---

---

## 大学・高専ニュース

### (1) 教育研究組織の改組、計画など

前橋工科大学

前橋工科大学は平成 19 年 4 月より、3 学科から 6 学科の新体制になりました。

詳しくはホームページ

<http://www.maebashi-it.ac.jp/index.php>  
をご覧ください。

(文責 田中恒夫)

山口大学  
学科改組（平成19年4月）

山口大学工学部循環環境工学科新設  
（文責 今井 剛）

## （2）人事

北見工業大学  
工学部土木開発工学科寒冷地工学講座  
平成 19 年 3 月  
〔定年退職〕海老江邦雄 教授  
平成 19 年 4 月  
〔着任〕永禮英明 准教授  
京都大学大学院工学研究科より  
（文責 永禮英明）

東北大学  
平成 19 年 4 月 1 日  
〔着任〕久保田健吾 助教  
日本学術振興会 PD から東北大学大学院工学  
研究科土木工学専攻環境保全工学研究室へ  
（文責 中野和典）

京都大学  
京都大学大学院工学研究科（環境工学コース  
関連研究室）  
平成 19 年 3 月 31 日  
〔定年退職〕武田信生 教授  
松井三郎 教授  
山田春美 助教授  
平成 19 年 3 月 31 日  
〔退職〕藤原健史 助教授（岡山大学へ）  
永禮英明 講師（北見工業大学へ）  
平成 19 年 4 月 1 日  
〔新任〕西村文武 准教授（都市環境工学専  
攻環境システム工学講座水環境工学分野）

倉田学児 准教授（都市環境工学専攻環  
境システム工学講座大気・熱環境工学分野）  
平成 19 年 4 月 1 日  
〔学内異動〕森澤眞輔 教授（都市環境工学  
専攻環境システム工学講座環境リスク工学分  
野から同環境デザイン工学講座へ）  
藤井滋穂 教授（工学研究科附  
属流域圏総合環境質研究センター環境質管理  
分野から地球環境学堂地球親和技術学廊環境  
調和型産業論分野へ）  
（文責 越後信哉）

徳島大学  
平成 19 年 3 月 31 日  
〔定年退職〕村上仁士 教授  
徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部  
平成 19 年 4 月 1 日  
〔着任〕同研究部 上月康則 教授  
同研究部 山中亮一 講師  
（文責 上月康則）

山口大学  
平成 19 年 3 月 31 日  
〔定年退職〕浮田正夫 教授  
（平成 19 年 4 月 1 日付山口大学名誉教授）  
平成19年3月1日  
〔昇任〕今井 剛 教授  
平成19年4月1日  
〔異動〕樋口隆哉 助教

社会建設工学科から循環環境工学科へ

(文責 今井 剛)

### (3) シンポジウム・講演会など

新潟大学

平成 17 年 7 月 1 日より新潟大学大学院自然科学研究科に開設されていた「地球温暖化地域学寄附講座(東京電力)」がその期間(2 年間)を終えるにあたり、学内助成金受領者による総合成果発表会が、5 月 12 日(土)10 時より 17 時半まで、新潟市万代市民会館で行われた。会場には朝早くから多数の市民・学生・新潟大学教員が詰めかけ、熱心な発表と質疑応答が行われた。この寄附講座の活動内容と、総合成果報告書は、ホームページ

(<http://www.gs.niigata-u.ac.jp/~kifu/>)から見るのとダウンロードすることができる。

本講座は東京電力のご厚意で 19 年 7 月より更に 2 年間、継続されることが決まっています。大学院自然科学研究科としては、2 期目の研究成果が問われることになる。

(高橋敬雄、大学院自然科学研究科教授、寄附講座事務局担当)

(文責 高橋敬雄)

東海大学

第 6 回海環境と生物および沿岸環境修復技術に関するシンポジウム

主催：海環境シンポジウム実行委員会

共催：九州大学・東海大学海洋学部・海底環境研究会

場所：九州大学西新プラザ大会議場

〒814-0002 福岡市早良区西新 2-16-23

TEL 092-831-8104 FAX 092-831-8105

日時：2007 年 7 月 12 日(木)・13 日(金)

参加費：論文集代として 2000 円

問合先：海環境シンポジウム実行委員会事務局  
〒424-8610 静岡県静岡市清水区折戸 3-20-1  
東海大学海洋学部海洋建設工学科内 福江正治

TEL:054-337-0921,0923

FAX:054-337-0921, 334-9768

e-mail: fukue@scc.u-tokai.ac.jp

(文責 福江正治)

東京大学

第 5 回東南アジア水環境国際シンポジウム  
(平成 19 年 11 月 7 日~9 日開催予定)

チェンマイ大学、アジア工科大学院との共催によりタイ国チェンマイにて開催する。

詳細は、

[http://www.env.t.u-tokyo.ac.jp/project/asian\\_water2007/](http://www.env.t.u-tokyo.ac.jp/project/asian_water2007/) において確認されたい。

14th International Symposium on Health-Related Water Microbiology

(平成 19 年 9 月 9 日~15 日開催)

主催：IWA specialist group on Health-Related Water Microbiology

第 14 回 国際水学会(IWA)水中の健康関連微生物シンポジウムが東京大学弥生講堂にて開催される。

口頭発表は 2007 年 4 月末で締め切られた。ポスター発表は 7 月末まで受け付けている。

詳しくは <http://watermicro2007.jp> まで。

(文責 片山浩之)

京都大学

第9回京都大学国際シンポジウム「人間の安全保障のための地球環境学」

日時：平成19年6月22日(金)～23日(土)

場所：京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール・国際交流ホール

主催：京都大学

企画・実施：京都大学大学院地球環境学堂

(GSGES)、京都大学国際交流機構(OPIR)

[http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05\\_event/2007/070622\\_11.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05_event/2007/070622_11.htm)

<http://www.ges.kyoto-u.ac.jp/events/intsympo1.html>

○第29回京都大学環境衛生工学研究会シンポジウム

平成19年7月19、20日京都大学桂キャンパスCクラスター グローバルホール入館

詳細については以下のウェブページをご覧ください。

<http://www.env.kyoto-u.ac.jp/kyoeiken/>

○第2回持続的な都市の水利用のための雨水と再生水に関する国際ワークショップ 2nd International Workshop on Rainwater and Reclaimed Water for Urban Sustainable Water Use

主催：京都大学工学研究科附属流域圏総合環境質研究センター、科学技術振興機構(JST)戦略的創造研究推進事業(CREST)研究領域「水の循環系モデリングと利用システム」

期日：2007年10月3日(水)～10月5日(金)

場所：ぱるるプラザ京都(JR京都駅正面北出口東徒歩3分)

テーマ：都市内の雨水利用、排水再利用、涵養地下水利用

参加費：無料

問合せ先：田中宏明、山下尚之

(yamashita@biwa.eqc.kyoto-u.ac.jp)

(京都大学工学研究科附属流域圏総合環境質研究センター)

詳細についてはホームページをご覧ください。

<http://www.eqc.kyoto-u.ac.jp/local/crest.html>

(文責 越後信哉)

大阪大学

第25回特別講演会

日時：平成19年6月28日(木)18:00～20:30

【講師】高 巖 先生(麗澤大学大学院国際経済研究科・教授、麗澤大学企業倫理研究センター・センター長)

【演題】持続可能な社会とこれからの企業のあり方

第26回特別講演会

日時：平成19年7月9日(月)18:00～20:30

【講師】小島 正美 先生(毎日新聞社東京本社生活家庭部・編集委員)

【演題】メディアのリスク情報の見方と付き合い方

第27回特別講演会

日時：平成19年7月30日(月)18:00～20:30

【講師1】関澤 純 先生(徳島大学総合科学部自然システム学科・教授)

【演題】「食の安全と安心」の課題を解決するには

【講師2】吉田 充 先生((独)農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所食品分析研究領域・状態分析ユニット長)

【演題】加工・調理食品中のアクリルアミド問題への対応

詳細・お申込みは下記をご参照ください。

<http://risk.see.eng.osaka-u.ac.jp/lecture/index.html>



(文責 下田吉之)

山口大学

土木学会環境工学委員会主催・環境工学研究フォーラム開催

平成19年11月16～18日、山口大学工学部(山口県宇部市)

土木学会中国支部研究発表会開催

平成19年6月1～2日、山口大学工学部(山口県宇部市)

(文責 樋口隆哉)

佐賀大学

ISLT2006 開催報告

平成18年9月14～16日、佐賀大学で低平地に関する国際シンポジウム(ISLT2006)を主催しました。会議には15カ国132名が参加し、「地盤」「水」「都市環境」をテーマに18のセッションを開き、質の高い研究発表がなされました。次回は2008年9月に韓国・釜山で開催する予定です。現在、韓国側組織委員会とセンターにて準備が進められています。

第10回低平地市民フォーラム開催報告

平成18年10月27日、佐賀県立美術館ホールにて第10回低平地市民フォーラムを開催いたしました。特別講演講師に(財)港湾空間高度化環境研究センターの善見氏をお迎えし、「湾内域の自然再生・順応的管理」と題してご講演いただきました。また、当センターで受託している科学技術振興調整費「有明海再生研究」の中間報告や中学生を交えた有明海の環境について活発な意見交換がなされました(参加者170名)。

平成18年度低平地研究会シリーズ講演会開催報告

全7回のうち、第1回講演(平成18年10月13日)では、国立環境研究所の原沢英夫氏をお招きし、「地球温暖化と水」と題してご講演をお願いしました。亜熱帯化が進む日本は今後どうなっていくのか、その影響はどのようなのか。また、原沢氏が関わる地球規模的なプロジェクトやIPCC(気候変動に関する政府間パネル)の動向もご紹介頂きました。水際に接する低平地域ではもちろんのこと、低平地にかかわらず一般生活にも影響する本話題は多くの方々に非常に興味を持っていただけました。とくに、いくつかのシナリオによる地球上の気温変動のシミュレーションは、予想以上の環境変化に多くの参加者が原沢先生の話に聞き入っておりました。今後、わたしたち人間が地球温暖化防止のために何をすべきなのかについて大いに考えさせられました。また、第2回講演(平成18年10月20日)では私たち身近な問題としての水問題を取り上げ、佐賀県の地元で広域的な防災対策を行っている武雄河川事務所長の中平氏をお招きしました。近年の想定外の自然災害の多発と佐賀低平地の水害についてご説明いただくとともに、施設整備による防災からソフト対策も含めた減災への発想転換、例えば、災害情報伝達体制の整備としての広域支援及び防災情報のネットワークの必要性などについてご説明いただきました。

平成18年度低平地研究会活動報告会・特別講演の案内

日時:平成19年5月24日、13:00-17:00

場所:佐賀大学理工学部6号館2F多目的セミナー室

低平地研究会の活動報告を年1回ペースで開催しているが、本年度は平成18年度の活

動報告とともに特別講演として東京大学、京都大学及び福岡大学を歴任し、広範な環境問題に取り組んでこられた市川新先生をお招きし、「公共事業のあり方：流域管理の観点から」という題目で講演をしていただく予定である。

平成 19 年度低平地研究会シリーズ講演会開催予告

期日：平成 19 年 7 月～12 月（予定）全 6 回

場所：佐賀大学理工学部 D C 棟（6 号館）予

定）

内容：低平地の「地盤」、「水」、「歴史」、「経済」、「くらしと文化」、「地域デザイン」を切り口とした各部会から、それぞれのテーマに関連した内容を特別講師による講演会形式で月 1 回のペースで開催予定。詳しくはホームページにて順次掲載予定

(<http://www.ilt.saga-u.ac.jp/lora/index.html>)

（文責 山西博幸）

#### （４）国際交流関係の事業などの取り組み

佐賀大学

ソウル大学と国際学术交流協定を締結  
低平地研究センターとソウル国立大学校海洋研究所（RIO）との間で学术交流協定を結びました。当センターで 1 年間客員教授として赴任された同大学校自然科学大学地球環境科学部（海洋学）の高先生との交流を発端に計画がまとまったものです。平成 19

年 1 月 18 日に荒木センター長が訪韓し、協定書に調印しました。干潟の水環境を含めた共同研究も進められ、すでに Brain Korea21（日本の CEO）による交流支援のオファーもいただき、また、ISLT2008 開催の強力なサポートも期待されます。

（文責 山西博幸）

#### （５）その他のニュース

大阪大学

環境リスク管理 PG 関連部分

<「環境リスク管理のための人材養成」プログラムとは>

大阪大学大学院工学研究科では、文部科学省科学技術振興調整費 新興分野人材育成の事業として、「環境リスク管理のための人材養成」プログラムを平成 16 年 10 月より運用し

ております。これは大阪大学大学院の正規の学生である「大学院生」、「科目等履修生」に加え、本プログラム独自の枠組みである「特別セミナー受講生」を対象として、環境リスク管理のための実践的な知識とスキルを有する人材「リスクマネージャ（環境）」の養成を目的とした教育プログラムです。これまでに、24 名が当プログラムでのカリキュラムを修

了され、「リスクマネジャ（環境）」の登録を申請しております。

現在、社会人の方でも、「科目等履修生」あるいは「特別セミナー受講生」として、当プログラムのカリキュラムを構成する全ての講義および演習を受講することができます。また、講義の一環として特別講演会を開催しております、こちらは一般の方々も聴講可能な形で、社会の幅広いの方々への普及・啓発も同時に行っております。

詳細は「環境リスク管理のための人材養成」プログラム事務局まで。

TEL・FAX：06-6879-7678、

mail：risk-office@em.see.eng.osaka-u.ac.jp

URL：<http://risk.see.eng.osaka-u.ac.jp/>  
(文責 下田吉之)

九州大学

九州大学の土木系教室（環境都市部門、建設デザイン部門）は新キャンパス（伊都キャンパス）への移転を、2006年度末に、ほぼ完了いたしました。新キャンパスの情報は、

<http://suisin.jimu.kyushu-u.ac.jp/>  
を、各研究室の情報は、

<http://www.doc.kyushu-u.ac.jp/>  
をご覧ください。

(文責 久場隆広)

---

## 事務局からのお知らせ

### 1) 名簿について

7月末から8月上旬にかけて、名簿を発送予定です。当会の運営にご協力をお願い致します。

### 2) 入会のご案内

ご入会ご希望の方がおられましたら、事務局までお知らせください。入会申込書を送付させていただきます。また、入会申込書はホームページからもダウンロードできます。

# 特集

博士論文・修士論文・卒業研究等テーマ

博士論文

大学名	学科・専攻名	著者名	題 目	指導教授 あるいは主宰
国立				
北海道大学	都市環境工学専攻	柿本 貴志	Treatment of pharmaceuticals at source using composting process of human excrement (し尿のコンポスト化反応を利用した医薬品の発生源処理に関する研究)	
北海道大学	都市環境工学専攻	葛 隆生	地中熱利用システム設計・性能予測ツールの開発とその応用に関する研究	
北海道大学	都市環境工学専攻	高津 俊司	首都圏における鉄道整備とまちづくりとの連携に関する実証的研究	
北海道大学	都市環境工学専攻	田畑 直樹	地震時の木造低層建物破壊に伴う人的被害の推定手法に関する研究	
北海道大学	都市環境工学専攻	對馬 育夫	Development of Super High-Rate Anaerobic Ammonium Oxidizing (Anammox) Biofilm Reactors (超高速型嫌気性アンモニア酸化 (Anammox) バイオフィルムリアクターの開発)	
北海道大学	都市環境工学専攻	林 美香子	農村と都市の共生による地域再生の基盤条件の研究	
北海道大学	都市環境工学専攻	Rattaphol PUEBOOBPAPH AN	New Development in Dynamic Estimation of Traffic States and Origin-Destination Demands for Advanced Transportation Systems (高度交通システムのための交通状態および起終点交通需要の動的推定における新手法の開発)	
北海道大学	都市環境工学専攻	HERTO DWI ARIESYADY	Ecophysiological Studies on Biodiversity of Fatty Acids-Utilizing Bacteria and Archaea in Anaerobic Digester Treating Domestic Wastewater Analyzed by Molecular Biological Techniques (分子生物学的手法を用いた都市下水汚泥の嫌気性消化における有機酸分解微生物の多様性と生態学的構造)	
北海道大学	都市環境工学専攻	堀田 真也	Onsite storage and treatment of Source separated human feces and urine (し尿のオンサイト処理、貯蔵に関する研究)	
北海道大学	都市環境工学専攻	Emad Salah Mushtaha	Housing Planning of Climatic, Social and Technological Environments in Developing Countries - Gaza as a Case Study (発展途上国における気候風土、社会、技術条件を考慮した住宅計画-ガザ市を事例として)	
北海道大学	都市環境工学専攻	THAMBIAH Muraleetharan	A Study on Level-Of-Service Analysis of Facilities Serving Pedestrians ---Toward an Effective Improvement of Pedestrian Mobility--- (歩行者施設のサービスレベル分析に関する研究:歩行者モビリティの効果的な改善に向けて)	
北海道大学	都市環境工学専攻	大和 信大	都市下水処理メンブレンバイオリアクターの膜ファウリングに関する研究	
北海道大学	都市環境工学専攻	山本 千雅子	品質機能展開法(QFD)による都市除雪の事業評価に関する研究	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	浅見 均	日本の幹線鉄道におけるインターオペラビリティ構築に関する研究	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	Werawan Manakul	Enhancing Quality of Graduate Engineering Education through English-medium Program (英語コースを通じた大学院工学教育の質の向上)	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	川上 征雄	わが国の国土計画にみる計画思想の史的研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	北村 敏也	高速列車走行に伴う低周波音の発生・影響とその制御に関する研究	
北海道大学	環境創生工学専攻	川村 力	実構造物の調査に基づいた鉄道コンクリート橋りょうの耐久性照査法に関する研究	
北海道大学	環境創生工学専攻	高柳 枝直	雨天時下水の効率化処理による合流式下水道改善の最適システムに関する研究	
北海道大学	環境循環システム専攻	細谷 昭悟	岩盤斜面における落石運動の数値解析	
北海道大学	環境循環システム専攻	横濱 勝司	繰返し载荷を受ける砂質地盤-構造物系の剛性変化の評価と変形解析法に関する研究	
東北大学		任 勇翔	Mechanisms of Estrogen Removal in Activated Sludge Process	西村 修
東北大学		武田 文彦	Evaluation of Allelopathic Effect of a Brown Alga Sargassum horneri Inhibiting the Growth of Diatom Skeletonema costatum	西村 修
東北大学		高荒 智子	Microcystis aeruginosa 由来の凝集阻害誘因物質の分離同定とその阻害特性評価	大村 達夫
東北大学		藤井 学	Kinetics of Superoxide-Mediated Reduction of Organically Complexed Iron and Ferric Iron Oxyhydroxide in Coastal Waters	大村 達夫
東北大学		渡辺 徹	流域における水系病原微生物のリスク評価手法の開発 ～公衆衛生的観点からの流域管理のための強力な ツールとして～	大村 達夫
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	岩井 祥子	オリゴヌクレオチドマイクロアレイによるベンゼン酸分解遺伝子の網羅的解析と土壌浄化力評価手法としての有 効性	古米 弘明
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	原本 英司	水環境中における腸管系ウイルスの挙動の定量的解析	大垣 眞一郎

博士論文

東京大学	工学系研究科都市工学専攻	松井 康弘	Fluoride removal from groundwaters using nanofiltration process	滝沢 智
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	金 賢児	ナノろ過膜を用いた浄水処理における前処理プロセスの影響	滝沢 智
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	池上 崇志	東京都区部における下水熱利用地域冷暖房システムの戦略的導入による二酸化炭素排出削減効果および経済性の解析	花木 啓祐
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	謝 俊民	Integrated analysis of thermal environment and building energy use by microclimate simulation	花木 啓祐
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	Chanetta Phanuwat	Occurrence and behavior of human enteric viruses in urban coastal water	大垣 眞一郎
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	黄 明九	Inactivation of Legionella pneumophila and Pseudomonas aeruginosa in water by using silver and copper	大垣 眞一郎
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	Quach Thi Thu Thuy	Effects of acid/base treatment of powdered activated carbon on adsorption and membrane fouling in PAC-Microfiltration system (PAC-MF)	滝沢 智
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	張 洪賓	Development of urban heat island simulation tool and its application to planning of Chongqing city, China	花木 啓祐
東京大学	新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻	小田和 賢一	分子生物学的手法による活性汚泥中バクテリオファージの分布および挙動の解析	佐藤 弘泰
東京大学	新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻	Adeline Seak May Chua	Ecophysiological study of bacterial groups involved in Enhanced Biological Phosphorus Removal Processes by using FISH-MAR technique	味埜 俊
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	余 輝	湖沼水質に及ぼす湖湾と主湖盆との相互影響に関する研究-琵琶湖塩津湾を例として-	津野 洋
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	孫 軼斐	Decomposition of polychlorinated biphenyls with activated carbon supported iron (鉄担持活性炭によるポリ塩化ビフェニルの分解)	武田 信生
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	張 鶴清	Behavior of endocrine disrupting chemicals in wastewater treatment process and their removal by ozonation (内分泌攪乱化学物質の下水処理過程における挙動とオゾン処理による除去特性)	津野 洋
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	赤尾 聡史	生ごみを原料とした高温L-乳酸発酵に関する研究	津野 洋
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	志々目 友博	沿岸域におけるダイオキシン類挙動のモデル化とリスク削減効果にの分析に関する研究	武田 信生
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	大下 和徹	前凝集プロセスを組み込んだ下水処理システムの特性とその評価に関する研究	武田 信生
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	新矢 将尚	都市道路堆積物中の鉛の発生起源とその流出挙動に関する研究	松井 三郎
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	東 賢一	住居環境における室内空気汚染物質のリスク評価および管理の枠組みに関する研究	内山 巖雄
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	根岸 昌範	金属還元剤を利用した地盤環境修復技術に関する研究	武田 信生
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	手島 肇	廃棄物処理におけるダイオキシン類田一作と複合型中間処理・再資源化システムの研究	武田 信生
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	八十島 誠	体外排出量の多い人用抗生物質の下水処理における除去特性に関する研究	田中 宏明
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	金森 有子	ライフスタイル変化を考慮した家庭部門からの環境負荷発生量に関する研究	松岡 譲
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	岸川 洋紀	騒音感受性を考慮した騒音影響の評価方法に関する研究	内山 巖雄
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	加藤 文隆	硫黄系薬剤による前凝集沈澱汚泥からのリン・凝集剤回収の実験的検討および評価	武田 信生
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	江口 正司	火葬炉の燃焼制御と環境負荷低減に関する研究	武田 信生
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	山本 浩	都市ごみ焼却残渣における重金属の化合物形態と無害化・資源化に関する研究	武田 信生
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	野村 直史	大学における化学物質等の管理状況の把握と実験室環境のリスク評価手法に関する研究	内山 巖雄
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	富士 暁之	鋼管杭打設が廃棄物処分 場底部粘土層の遮水性能に及ぼす影響の評価	嘉門 雅史
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	松橋 大作	ソイルベントナイト遮水 壁の遮水性能に及ぼす諸要因の解明とその設計への反映	嘉門 雅史
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	Giancarlo Augusto Flores	Evaluation of LNAPL Migration under Fluctuating Groundwater Conditions by an Image Analysis Method (画像解析による地下水変動条件下のLNAPL挙動の評価)	嘉門 雅史
京都大学	工学研究科環境工学専攻	三崎 健太郎	大気環境中のAhR活性多環芳香族化合物の探索およびその遺伝子発現と毒性作用に関する研究	松井 三郎
京都大学	工学研究科環境地球工学専攻	日下部 武敏	琵琶湖天然有機物質の分子量分布および微量有機汚染物質の取着に関する研究	松井 三郎
京都大学	地球環境学舎地球環境学専攻	Saravanan Mariappan	Interface Shear Strength of Composite Landfill Liner	嘉門 雅史
京都大学	地球環境学舎地球環境学専攻	安 希慶	RoHS指令に対するグリーンサプライチェーンマネジメントのシステム構成	松井 三郎
京都大学	地球環境学舎地球環境学専攻	池嶋 規人	低圧逆浸透膜による微量汚染物質の分離に関する研究	松井 三郎
京都大学	地球環境学舎地球環境学専攻	鍛冶 晴奈	天然及び食品由来のAhRリガンドに関する研究 A Research on Natural- and Food- Derived AhR Ligands	松井 三郎

博士論文

京都大学	地球環境学舎地球環境学専攻	河井 紘輔	A proposal for the promotion of municipal solid waste recycling in Hanoi, Vietnam ベトナム・ハノイにおける都市廃棄物循環の促進に関する提案	松井 三郎
京都大学	地球環境学舎地球環境学専攻	中村 武洋	Ecosystem-based River Basin Management: Its Conceptual Development and Policy Application in the Yangtze River Basin (エコシステムに基づく流域管理:揚子江対象に概念の展開と政策への応用)	松井 三郎
京都大学	地球環境学舎地球環境学専攻	原田 英典	A Proposal of Advanced Sanitation System and Attempts to Improve Vietnamese Sanitation (先進的サニテーションシステムの提案およびベトナム衛生改善への試み)	松井 三郎
京都大学	地球環境学舎地球環境学専攻	周 佩欣	Xenobiotic AhR ligands in the aquatic environment: detection, identification, and their toxicological implication	松井 三郎
京都大学	地球環境学舎地球環境学専攻	増富 祐司	世界流域データベースの開発とその応用	松岡 譲
山口大学	理工学研究科環境生工学専攻	朱 花	新規酸素供給法の開発及び高効率な有機物とアンモニアの同時除去	浮田正夫,今井剛
九州大学		李 昇潤	都市河川感潮域干潟部における窒素変換機構とN <sub>2</sub> Oの生成・挙動に関する研究	楠田 哲也
九州大学		李 志華	BIOCHEMICAL CHARACTERISTICS OF AERBIC GRANULATION AND STABILITY OF AEROBIC GRANULAR SLUDGE	久場 隆広
九州大学		張 瑞娜	Geochemical Weathering of Municipal Solid Waste Incineration Residues in Landfills	島岡 隆行
九州大学		金 華榮	コンテナターミナルにおける荷役の機能設計と評価に関する研究	島岡 隆行
九州大学		小宮 哲平	廃棄物の適正管理におけるリモートセンシングの適用に関する研究	島岡 隆行
九州大学		才田 進	都市化域における水循環機構の解析モデルと健全化に関する研究	神野 健二
九州大学		HATTA MUKHSAN PUTRA	有明海における流動構造の生成要因とその変化に関する研究	小松 利光
熊本大学	自然科学研究科環境共生科学専攻	Tran Thi Hien Hoa	「Studies on nitrogen removal by the anammox process using various biomass carriers with different reactor configurations」(各種微生物担体を活用するアナモックスプロセスによる窒素除去に関する研究)	
熊本大学	自然科学研究科環境共生科学専攻	成 英俊	「Advanced wastewater treatment using acryl-resin fiber biomass carrier」(アクリル繊維性の微生物担体を用いた排水の高度処理に関する研究)	
熊本大学	自然科学研究科環境共生科学専攻	首藤 征男	「水環境における環式有機スズ化合物の生分解」	

修士論文

大学名	学科・専攻名	著者名	題 目	指導教授 あるいは主宰
国立				
北海道大学	都市環境工学専攻	Abdullaev Akhmad	On Rural Tourism and Sustainable Development in Hokkaido	
北海道大学	都市環境工学専攻		(北海道における農村観光と持続可能な開発に関する研究)	
北海道大学	都市環境工学専攻	近藤 良美	浄水処理プロセスが水道水質に及ぼす影響要因の統計的評価	
北海道大学	都市環境工学専攻	Shiwakoti Nirajan	Simulation of Pedstrian Dynamics in Case of Emergency Evacuation in a Community	
北海道大学	都市環境工学専攻		(緊急避難時における歩行者の動的シミュレーションに関する研究)	
北海道大学	都市環境工学専攻	辻 将行	実証実験に基づく燃料電池最適運転方法の検討と総合評価	
北海道大学	都市環境工学専攻	Huelgas Aileen Parra	Effect of Organic Loading Rate on Treatment of Kitchen Sink Wastewater Using SubMBR	
北海道大学	都市環境工学専攻		(膜分離活性汚泥法を用いたグレイウォーター処理に関する研究)	
北海道大学	都市環境工学専攻	三浦 友美	明治前期の初等学校建築関連書に関する研究	
北海道大学	都市環境工学専攻	藁川 恭子	積雪寒冷地域における子供の遊び場に関する研究 -札幌市中央区を事例として-	
北海道大学	都市環境工学専攻	May Thithiwat	Natural Horizontal Gene transfer in Escherichia Coli Biofilms:The Role of F Conjugative Plasmid in Biofilm Development and Maturation Escherichia coil	
北海道大学	都市環境工学専攻		(バイオフィーム内における遺伝子の水平伝播:F因子のバイオフィーム形成に果たす役割)	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	内山 弘行	坑廃水のフェライト処理にともなう生成殿物の性状に関する研究	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	蝦名 宣弘	融雪出水時の河口沿岸域における懸濁物質輸送特性	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	大内 苑子	札幌都市圏におけるヒ素化合物の分布特性と汚染機構	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	岡野谷 哲平	サロベツ湿原における水文地質特性と植生との関係	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	片岡 卓也	衛星リモートセンシングによる東アジア陸域エアロゾルの広域分布の評価	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	北野 智也	木質ペレットの燃焼に関する基礎的研究	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	藏田 博文	水溶液環境下における岩石のサブクリティカル亀裂進展に関する研究	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	来間 賀子	間寒別川流域の森林及び酪農地域における窒素負荷に関する研究	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	佐藤 和弥	北極圏の大気汚染に対する排出源寄与に関するモデル評価	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	猿渡 亜由未	ジェット着水に伴う水面と渦のダイナミクス	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	篠原 隆一郎	浅い湖沼における底泥由来懸濁物質の水質及び植物プランクトンへの影響	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	高橋 圭吾	拡幅・分級を伴う移動床水路の底面変動に関する実験および1次元解析	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	鳥井 真平	床止周辺流れに関する基礎的研究	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	中島 義晴	紫外分光法を用いた気相状態タールモニタリング手法の開発	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	鳴海 啓太	釧路湿原における水環境と植生	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	林田 実	液-液二相流の界面運動のシミュレーション	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	古川 聡子	近紫外および可視領域における大気エアロゾルの光学特性	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	村尾 彰了	炭酸カルシウム法によるバイオグラウトの開発に関する基礎的研究	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	守屋 薫	常流移動床分岐水路における底面不安定の発生条件	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	横田 光博	Fracture Patterns of Rock Induced by High-voltage Pulse Crushing - Three-dimensional visualization by using micro-focus X-ray CT and numerical fracture process analysis -	
北海道大学	環境フィールド工学専攻		(高電圧パルス粉碎における岩質材料中の亀裂形態に関する研究~マイクロフォーカスX線CTを利用した3次元的な亀裂観察及び亀裂形態の数値解析~)	
北海道大学	環境フィールド工学専攻	吉崎 貴哉	応力測定結果の逆解析による地盤内三次元応力場の同定	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	青木 光昇	新幹線の高速化が高架橋振動特性に与える影響	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	和泉 康平	道路ブランド評価に関する基礎的研究	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	上村 友美	河川の硝酸性窒素汚染源同定のための大腸菌群遺伝子分析手法の検討	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	久恵 怜子	慣性力の影響を考慮した熱応力解析	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	清水 心太	家畜ふん尿の適正管理および有効利用促進のための施設導入可能性の検討	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	杉原 卓治	震災時における歩行者と自動車の交錯を考慮した避難行動シミュレーションに関する研究	



## 修士論文

北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	鈴木 雄太	低泥の流動解析に基づく回収装置形状の検討	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	竹中 康倫	廃棄物系バイオマスを活用する自治体のリサイクルシステム選択のためのANP手法の検討	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	寺島 令	道路利用者の経路選択を考慮した除雪作業計画に関する研究	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	戸田 晶	鋼繊維補強RC部材の引張試験によるコンクリートの応力-ひずみ曲線に関する研究	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	戸田 佑紀	北海道における最終処分場の再生可能性とバイオガス発生ポテンシャルの検討	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	長尾 由加利	不法投棄現場の環境再生に関するニーズ調査手法の提案-青森・岩手県境不法投棄現場の跡地利用を	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	長山 真子	原位置バイオレメディエーション法によるテトラクロロエチレン汚染現場の修復可能性の検討-カラム連続試験によるモデルパラメータの決定と修復効果予測-	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	坂東 政彦	札幌市の住宅街における官民協働の運搬排雪ニーズに関する研究	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	日浅 崇平	永久凍土地帯における埋設型冷却ガスパイプラインとフロストバルブの相互作用の実験的研究	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	舩屋 繁和	感潮域における地形シミュレーション	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	松村 正士	軸対称モデルによる凍土と構造物との相互作用評価	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	丸山 史人	要求意図表現に着目した自由回答分析に関する研究	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	三木 克則	交差点右折時の歩行者事故危険性評価に関する研究	
北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	水野 秀樹	統計的手法に基づいた冬期路面状態の推定と予測に関する研究-車両運動によるオンライン逆推定-	
北海道大学	空間性能システム専攻	相川 葉月	実環境を考慮した乾湿繰返しを加えたコンクリートの耐凍害性試験方法の検討	
北海道大学	空間性能システム専攻	足立 卓彌	稚内層珪質頁岩のVOCガス吸着性能向上に関する研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	阿部 友香	横浜市美しが丘における歩行者専用道路の計画とその変容	
北海道大学	空間性能システム専攻	糸井川 高徳	仰臥姿勢の人体を対象とした病室冷房環境の生理的・心理的評価	
北海道大学	空間性能システム専攻	上野 雅悠子	国土数値情報を用いた地下熱利用システムの導入可能性に関する研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	岡本 暁彦	単一トレーサーガス法による多数室換気測定手法の検討	
北海道大学	空間性能システム専攻	上川 優貴	路面熱発電電:熱発電装置の設計とフィールド試験	
北海道大学	空間性能システム専攻	加茂 雄宇太	外断熱外装材の壁体構成による膨張収縮	
北海道大学	空間性能システム専攻	金納 裕治	音響的にソフトな表面を持つ遮音壁周辺の音場の研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	木幡 悠士	オフィス空間における室温分布に関する実験的研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	近藤 亮太	Study on environmental energy diagnosis for detached houses (戸建て住宅の環境エネルギー工学的診断に関する研究)	
北海道大学	空間性能システム専攻	佐近 圭輔	RC造外断熱建物の外壁通気層仕様による乾燥性状とその適用性	
北海道大学	空間性能システム専攻	塩崎 一紀	微酸性電解水を活用した都市公共施設における室内微生物汚染の制御に関する研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	塩澤 拓馬	Study on residential hydrogen energy system at normal temperature and pressure (住宅用設備として水素エネルギーを安全に取り扱うための常温・常圧利用システムの開発)	
北海道大学	空間性能システム専攻	柴山 大	汎用温熱生理心理予測システムに関する研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	島村 泰彰	帯広における緑とオープンスペースの計画思想の展開について	
北海道大学	空間性能システム専攻	土屋 敦史	ローエネルギーハウス対応型多機能地中熱ヒートポンプシステムの開発に関する研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	寺口 拓矢	柱SC梁S混合構造架構における柱のせん断抵抗性状に関する実験的研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	中島 弘二	少子高齢化社会における子どもと高齢者の健康に関する研究 -東アジアの子ども、北海道高齢者データベースの作成とその応用-	
北海道大学	空間性能システム専攻	中谷 則天	無効発汗を考慮した体温予測モデルを用いた屋外暑熱環境評価方法に関する研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	中山 和樹	低温排熱を用いた潜熱・顕熱分離空調に関する研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	早崎 登	開口を有するRC枠組積造壁体のせん断抵抗および開口補強効果に関する実験的研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	早瀬 崇城	RC基礎梁に埋込んだ鉄骨アンカー近傍に発生する局部支圧破壊機構に関する解析的研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	平井 浩将	経路探索におけるアクション生起とツール属性との関係-都市空間における日常生活での歩行特性-	
北海道大学	空間性能システム専攻	平井 雄太郎	限界飽水度法によるサイディング材の耐凍害性評価方法の提案	
北海道大学	空間性能システム専攻	松浦 睦	鋼板とコンクリートの付着性状に及ぼす鋼板断面形状と直交拘束力の影響に関する実験的研究	
北海道大学	空間性能システム専攻	吉村 文利	寒冷地における家庭用コージェネレーションシステム設備統合最適利用および導入可能性に関する研究	
北海道大学	環境創生工学専攻	井野 雄介	コンポスト化過程におけるおがくず担体の物理的性質に関する研究	

修士論文

北海道大学	環境創生工学専攻	大岩 祐司	凍結及び融解時におけるモルタルの変形挙動解析	
北海道大学	環境創生工学専攻	大澤 輝真	尿中医薬品の電解酸化処理に関する実験	
北海道大学	環境創生工学専攻	小川 真吾	コンポスト型トイレの代替エネルギーとしての米ぬか利用に関する研究	
北海道大学	環境創生工学専攻	小関 直	臭化物・ヨウ化物イオンの共存が塩素処理時の消毒副生成物に与える影響	
北海道大学	環境創生工学専攻	小野 香保里	定量化MAR-FISH法を用いた新規Betaproteobacteriaの機能解析	
北海道大学	環境創生工学専攻	小畑 潤平	曲線2主桁橋における垂直補剛材の局部応力に関する研究	
北海道大学	環境創生工学専攻	小山 香寿美	アスファルト舗装における高温時の骨材間のひずみ	
北海道大学	環境創生工学専攻	近藤 拓也	凝集・MFを前処理としたNF膜のろ過性	
北海道大学	環境創生工学専攻	佐藤 英樹	自己充填性を有する鋼繊維補強モルタルの繊維配向性と引張挙動	
北海道大学	環境創生工学専攻	澤岡 大輔	MF膜処理における操作圧力が藻類へ与える影響	
北海道大学	環境創生工学専攻	澤崎 渉	ヘルスマニタリングにおける構造特性同定に関する研究	
北海道大学	環境創生工学専攻	嶋津 陽子	Persistence of host-specific Bacteroides-Prevotella 16S rRNA genetic markers in environmental waters (宿主特異的Bacteroides-Prevotella 16Sr RNA遺伝子マーカーの環境水中での挙動)	
北海道大学	環境創生工学専攻	白井 遼太郎	構造物-地盤の動的相互作用を考慮した鋼斜張橋の非線形地震応答に関する研究	
北海道大学	環境創生工学専攻	高野 昭弘	種々のアスファルト混合物の破壊強度に関する研究	
北海道大学	環境創生工学専攻	中川 喜博	下水汚泥焼却灰を利用したCLSMの開発	
北海道大学	環境創生工学専攻	中村 拓郎	ポーラスコンクリートの耐凍害性に関する研究	
北海道大学	環境創生工学専攻	野口 友寛	原水質, 処理系, 給配水系を組み込んだ給水質予測モデルに関する検討	
北海道大学	環境創生工学専攻	原 宏江	Removal of Pharmaceuticals from Municipal Wastewater using Membrane Bioreactors and Activated Sludge (膜分離活性汚泥法と活性汚泥法を用いた都市下水処理における医薬品の除去)	
北海道大学	環境創生工学専攻	半沢 拓	ジルコニウムメゾ構造体を用いた下水汚泥中リンの濃縮・高純度化	
北海道大学	環境創生工学専攻	前田 智宏	前凝集条件の差異がMF膜ろ過の膜ファウリングおよび処理水質に及ぼす影響	
北海道大学	環境創生工学専攻	松尾 祐樹	簡易処理装置の設置によるBangladeshヒ素汚染地域住民の水と食物からのヒ素摂取量の変化	
北海道大学	環境創生工学専攻	松本 繁治	曲線2主桁橋の送り出し架設時における合成度評価に関する研究	
北海道大学	環境創生工学専攻	水野 創太	複合劣化促進型ポーラスコンクリートの研究	
北海道大学	環境創生工学専攻	三好 太郎	Membrane Bioreactorにおいて膜ファウリングの進行に関与する有機物の特性解析	
北海道大学	環境創生工学専攻	横尾 博行	ヒトDNA マイクロアレイによる有害金属毒性評価及び遺伝子マーカーの探索	
北海道大学	環境創生工学専攻	渡辺 一郎	高温環境下におけるハイブリッド繊維補強高強度コンクリートの破壊靱性	
北海道大学	環境循環システム専攻	浅野 純	ベントナイト緩衝材の浸水時における膨張・圧縮挙動	
北海道大学	環境循環システム専攻	伊藤 亜希子	鉄鋼スラグからの陰イオン吸着材の合成とその特性	
北海道大学	環境循環システム専攻	梅谷 晋平	SPLICE法による対策工設計用強度パラメータの決定に関する研究	
北海道大学	環境循環システム専攻	大久保 利哉	一般廃棄物処理事業診断ツールの構築に関する研究	
北海道大学	環境循環システム専攻	大谷 祐介	高アルカリ環境におけるスメタイトの溶解速度への飽和度の影響	
北海道大学	環境循環システム専攻	大村 健	振動検出用ケーブルセンサの出力電圧と物理量に関する研究	
北海道大学	環境循環システム専攻	大矢 学	拘束されたモルタルの収縮ひび割れ特性に関する研究	
北海道大学	環境循環システム専攻	尾崎 悠太	破砕性粒状体の強度特性に及ぼす凍結融解履歴の影響評価に関する研究	
北海道大学	環境循環システム専攻	越智 大司	ジグ選別における最適条件と流動化現象	
北海道大学	環境循環システム専攻	恩田 真吾	黄銅鉍浸出の電位制御による最適化	
北海道大学	環境循環システム専攻	笠間 太樹	遠心模型実験装置を用いた不飽和土斜面の安定に関する研究	
北海道大学	環境循環システム専攻	小石 哲央	自治体のごみ処理コスト評価ツール作成およびコストの要因分析に関する研究	
北海道大学	環境循環システム専攻	佐々木 陽子	粉末X線回折による地質材料の鉍物定量 ～リートベルト法の適用～	
北海道大学	環境循環システム専攻	佐田 哲也	北海道大学における環境に関する教育・研究状況の分析	
北海道大学	環境循環システム専攻	高木 智史	阿武隈花崗岩の風化変質と地質工学的性質	
北海道大学	環境循環システム専攻	中村 祐亮	ベントナイト混合土の品質評価法に関する基礎的研究	
北海道大学	環境循環システム専攻	中村 孔亮	廃電線被覆材リサイクルのための有害成分除去技術の開発	

修士論文

北海道大学	環境循環システム専攻	橋野 尊人	Prediction of Deformation of NATM Road Tunnels in Hokkaido, Japan (北海道のNATM道路トンネルにおける変位量の予測に関する研究)	
北海道大学	環境循環システム専攻	蛭川 泰卓	エコセメントの強度発現に及ぼす水和反応の影響	
北海道大学	環境循環システム専攻	福津 圭基	種々の路盤材の繰返し変形特性に及ぼす主応力回転の影響とその評価法	
北海道大学	環境循環システム専攻	牧志 諒	重金属回収のための都市ごみ焼却施設における高温集じんに関する研究	
北海道大学	環境循環システム専攻	牧野 賢作	堆積岩及び熱水変質岩中の砒素の溶出挙動評価に関する研究	
北海道大学	環境循環システム専攻	水林 晋哉	溶融スラグ・焼却主灰および鉛汚染土壌からの重金属溶出に与える環境因子の影響に関する研究	
北海道大学	環境循環システム専攻	森木 翼	プレロード工法と真空圧密工法の沈下抑制効果の比較に関する研究	
北海道大学	環境循環システム専攻	山口 英志	深海底鉱物資源の有効利用に関する研究 ～コバルトリッチクラストの選鉱に関する基礎的研究～	
北海道大学	環境循環システム専攻	山口 真基	Some Mechanical Properties of Horonobe Siliceous Rocks (幌延珪質岩のいくつかの力学的特性に関する研究)	
東北大学		大堀 雅人	人工湿地法のエストロゲン除去性能に及ぼす影響因子	中野 和典
東北大学		石井 晴彦	排水の脱窒処理における窒素化合物の挙動とオゾン・生物複合システムの適用	西村 修
東北大学		岩淵 藍子	マコモの生育基盤およびハクチョウの摂食がマコモの成長に与える影響	中野 和典
東北大学		国安 弘幸	高温好気法におけるメタン発酵廃液の処理特性	中野 和典
東北大学		設楽 和彦	漆沢ダムにおけるアオコ発生に伴う水質応答と制御効果の検討	西村 修
東北大学		谷口 崇至	異なる基盤構造がコンパクトウェットランドの水質浄化性能に与える影響	中野 和典
東北大学		名尾 孝樹	干潟有機物動態を予測可能とする微小電極法の開発とその評価	西村 修
東北大学		草野 光	AFLP法を用いたウルマーシマトビケラ(Hydrosyche orientalis)地域集団の遺伝的多様性の評価	大村 達夫
東北大学		淵上 洋輔	沿岸域における有機第二鉄の還元メカニズムの解明	大村 達夫
東北大学		三浦 尚之	メコン流域における水利用と感染症リスク	大村 達夫
東北大学		和田 圭史	新規ウイルス検出技術に用いる吸着材としてのNorovirus-Binding Protein (NoVBP)の分離及び同定	大村 達夫
東北大学		岩田 浩二	オゾン酸化による活性汚泥の変質及び生分解性の向上	李 玉友
東北大学		小林 拓朗	分子生物学的手法を用いた余剰汚泥の嫌気性消化微生物群集構造の解析	李 玉友
東北大学		佐藤 史学	A2O法におけるリンと窒素の挙動に及ぼす汚泥濃度の影響	李 玉友
東北大学		米本 剛史	下水処理におけるエネルギー消費に関する統計分析	李 玉友
岩手大学	工学研究科・建設環境工学専攻	舘 紀昭	付着藻類を指標としたアルミニウムの河川生態系への影響	海田・伊藤
新潟大学	自然科学研究科 環境共生科学専攻	足立 渉	光照射による環境中ダイオキシン類の分解に関する研究	高橋 敬雄
新潟大学	自然科学研究科 環境共生科学専攻	小野寺 充	新潟県内における水田土壌、米中の重金属含有量について	高橋 敬雄
新潟大学	自然科学研究科 環境共生科学専攻	勝山 陽子	高度浄水処理の採用と配水系統の変更に伴う水道水質の変化について—新・新潟市の場合—	高橋 敬雄
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	伊崎 聖太郎	Escherichia coliの光回復に及ぼす塩分の影響	大垣 眞一郎 滝沢 智 片山 浩之
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	大塚 佳臣	流域の生活排水マネジメントに対する水辺の価値選好評価法の適用	花木 啓祐 栗栖 聖
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	黒田 啓介	東京都区部の地下水水質特性とその影響因子の解明	滝沢 智 大垣 眞一郎 片山 浩之
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	高橋 亮介	Janibacter terrae近縁細菌の特異的検出とダイオキシン類分解特性の評価	古米 弘明 栗栖 太
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	細見 暁彦	多摩川における微細有機物の動態と底生動物群集構造との関係に与える自然攪乱及び人為影響の評価	古米 弘明 栗栖 太
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	森下 賢一	大気中PAHs浄化能力評価を目的とした沿道植物葉中における1-OH pyreneの検出	花木 啓祐 栗栖 聖

修士論文

東京大学	工学系研究科都市工学専攻	和田 健男	集積培養微生物群によるクロロエチレン類の脱塩素活性に及ぼす影響因子に関する研究	古米 弘明 栗栖 太
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	Pan Yun	Study on decolorization performance and extracellular enzymatic activity of white rot fungi ( <i>Irpex lacteus</i> , <i>Pleurotus ostreatus</i> and <i>Lentinula edodes</i> ) in dye wastewater treatment	山本 和夫 富士 謙介 中島 典之
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	Joko Sulistyio Yekti	Factors affecting supercritical carbon dioxide extraction of PAHs from contaminated soil	山本 和夫 富士 謙介 中島 典之
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	Pasha Sohel	Evaluation of introducing Clean Development Mechanism (CDM) in public transport system of Dhaka,	花木 啓祐
東京大学	工学系研究科都市工学専攻	Ana Paula Bortoletto	Analysis of integrated management practices of municipal solid waste in Brazil	花木 啓祐 栗栖 聖
東京大学	新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻	玉井 暁大	サステナビリティ教育における学際性および多様性に関する研究	味埜 俊
東京大学	新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻	金井 佑樹	亜硝酸型硝化-完全硝化反応の制御とその遷移過程における硝化細菌の挙動解析	味埜 俊
東京大学	新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻	新井 俊介	内湾底質環境を反映する微生物群集とその平面分布の把握	佐藤 弘泰
東京大学	新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻	西條 拓磨	ネットワーク型環境NPOの多様性と変革過程に関する研究-ごみ環境ビジョン21とかしわ環境ステーションを事例として-	佐藤 弘泰
東京大学	新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻	都築 淳	リソースの適正管理に向けた市町村レベルでのMaterial Flow Analysis	佐藤 弘泰
東京大学	新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻	中野 拓磨	N-acetyl-homoserine lactone(AHL) による活性汚泥内群集構造への影響評価	味埜 俊
東京大学	新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻	村上 達也	プロピオン酸を基質とするPHA蓄積細菌の機能遺伝子と種の同定の試み	佐藤 弘泰
東京大学	新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻	藤原 和也	MAR-FISH法を用いたポリリン酸蓄積細菌とグリコーゲン蓄積細菌の競合関係の評価	味埜 俊
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	相木 敢	廃棄物構成元素動態に着目した震災廃棄物処理システムのリスク評価	森澤 眞輔
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	戒井 伸悟	高等植物シロイヌナズナを用いた土壌重金属汚染の影響評価方法の検討	森澤 眞輔
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	大隈 建	油汚染土壌バイオレメディエーションの効率化と硫酸塩還元状態の有効性評価	田中 宏明
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	川端 祥浩	琵琶湖NOMを対象としたFouling原因物質の特性解明	藤井 滋徳
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	來田 吉弘	IndirubinとTNF- $\alpha$ の複合作用におけるp21発現誘導に寄与する転写因子の探索	松井 三郎
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	熊田 裕佳子	油汚染土壌の硫酸塩還元条件下バイオレメディエーションにおける微生物群集解析	藤井 滋徳
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	小林 義和	下水処理場における医薬品類の存在実態の解明および活性汚泥処理による除去特性の把握	田中 宏明
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	後藤 慎平	アジア地域を対象とした大気汚染物質の排出量推計に関する研究	松岡 譲
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	齊藤 卓弥	廃瓦を用いた土壌浸透処理の性能評価と高効率化	森澤 眞輔
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	齋藤 宏彰	気候変動による影響の定量化に関する研究	松岡 譲
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	柴 博文	高濃度鉄含有炭化物のPCBs分解触媒としての機能と評価	武田 信生
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	滝 光伸	プロテオーム解析による鉛化合物の神経毒性マーカー探索	森澤 眞輔
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	立花 啓	プラスチック製容器包装のリサイクル制度に関する改善策の定量的評価	武田 信生
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	田中 みわ	気候モデル開発とそれを用いた温室効果ガス許容排出量推計	森澤 眞輔
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	傳田 拓也	アルデヒド類曝露による生物学的曝露指標の開発に関する研究	内山 巖雄
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	萩原 崇博	灰溶融プロセスを利用した廃プラスチックのケミカルリサイクルに関する検討	武田 信生
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	原 浩一	騒音曝露による聴力損失を推定するための熱力学的聴覚数理モデル	内山 巖雄
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	福井 和樹	蛍光管に含有される水銀のライフサイクル挙動と循環システムに関する研究	酒井 伸一
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	藤森 崇	金属触媒の動的変化に伴う飛灰でのダイオキシン類生成	武田 信生
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	宮井 公太郎	生ごみ発酵L-乳酸からの生分解性ポリ乳酸生成に関する研究	津野 洋
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	森 彰宏	種々の下水汚泥の熱分解特性と残渣および生成ガスの利用に関する研究	武田 信生
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	森 修一	テレフタル酸含有廃水の生物活性炭嫌気性処理における微生物解析	津野 洋
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	森谷 直子	東北タイ農村地域における水・物質収支モデルの構築	藤井 滋徳
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	山下 隆久	人口・世帯構成の変化が環境負荷発生量に及ぼす影響に関する研究	松岡 譲
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	西村 想	帰化植物チクゴスズメノヒエの植栽ヨシ群落への侵入に関する影響要因の検討	藤井 滋徳
京都大学	工学研究科都市環境工学専攻	長谷川 絵里	初期オゾン消費量を考慮した効果的オゾン処理技術の開発	津野 洋

## 修士論文

京都大学	地球環境学舎環境マネジメント専攻	小川 純子	廃棄物が地下に存在する土地の形質変更に伴う環境リスク評価と対策技術	嘉門 雅史
京都大学	地球環境学舎環境マネジメント専攻	五味 馨	地方自治体における環境の定量的将来ビジョン開発に関する研究	松岡 謙
京都大学	地球環境学舎環境マネジメント専攻	小川 真佐子	野生生物肝臓中の未知DNA付加体の網羅的解析及び各種汚染バイオマーカーとの関連性	松井 三郎
京都大学	地球環境学舎環境マネジメント専攻	若松 めぐみ	人尿中植物ホルモンの探索	松井 三郎
京都大学	地球環境学舎環境マネジメント専攻	押川 由希	京都大学EMS構築にむけた情報収集マネジメントの考察	松井 三郎
大阪大学		旭 貴弘	エネルギー最終需要モデルを用いた日本の家庭部門エネルギー消費量の評価	下田 吉之
大阪大学		諫山 直亮	地域冷暖房システムの高効率化に関する研究	下田 吉之
大阪大学		石垣 泰	中小規模建築に着目した都市業務部門のエネルギー消費削減シナリオに関する研究	下田 吉之
大阪大学		石野 理絵	長屋住宅地区の住宅の持続性と居住者意識に関する研究	澤木 昌典
大阪大学		市橋 数理	低エネルギー電子線照射によるSi(100)2×1:H表面におけるSi-H結合切断機構の研究	谷村 克己
大阪大学		井上 みを	光透過型太陽電池を適用した住宅の省エネルギー性評価に関する研究	下田 吉之
大阪大学		今村 寧	Study on bulk thermoelectric materials composed of environmentally friendly elements	宇埜 正美
大阪大学		岩切 翔	地域の音環境を切り口としたまちづくりに関する研究	桑野 園子
大阪大学		内野 茂晴	企業都市のコンパクトシティとしての再評価に関する研究	澤木 昌典
大阪大学		大屋 章	高出力レーザーを用いたプラズマジェットと衝撃波生成に関する研究	乗松 孝好
大阪大学		大山 将央	テトラヒドロフラン (THF) 分解菌による1,4-ジオキサンの共代謝分解に関する研究	池 道彦
大阪大学		岡田 一文	低減速軽水炉の転換比に対する予測精度の向上	竹田 敏一
大阪大学		岡本 年樹	マイクロ炉物理に基づく動特性計算の高速化	竹田 敏一
大阪大学		尾崎 剛	ストレスの評価方法構築のための基礎的研究	泉 佳伸
大阪大学		甲斐 友朗	限界集落の予備軍における集落存続に対する居住者及び集落出身者の意向に関する研究	澤木 昌典
大阪大学		梶谷 嘉則	土地利用施策による熱環境変化とCO2削減効果の評価	盛岡 通
大阪大学		金岡 秀明	セラミック製フォトリソグラフィ結晶の創製とEMC材料への応用に関する研究	宮本 敏生
大阪大学		金光 崇徳	Thermoelectric properties of ZrNiSn based solid solutions	宇埜 正美
大阪大学		川岸 正寛	Study on the synthesis conditions for photocatalytic apatite	宇埜 正美
大阪大学		神崎 雅也	微生物機能を利用したヒ素汚染土壌の浄化技術の開発に向けた基礎研究	池 道彦
大阪大学		姜 同徹	マイクログリッドによる地域分散型エネルギーシステムに関する研究-エコエネルギーウェブ金沢のケーススタディを通して-	盛岡 通
大阪大学		北畠 直司	形状変化の観察による量子線が細胞に与える影響の評価	西嶋 茂宏
大阪大学		木村 雄二	シナリオアプローチを用いた持続可能なライフスタイルのデザインと製品環境政策の評価	盛岡 通
大阪大学		黒田 洋一	ダブルデッカー電子ビーム加速器の開発とアト秒パルスラジオリシスの研究	吉田 陽一
大阪大学		小林 達彦	ステンレス鋼エロージョンに及ぼす鉛フリーはんだ中の微量元素の影響	竹本 正
大阪大学		後藤 圭太	Thermoelectric properties of thallium compounds with extremely low thermal conductivity	山中 伸介
大阪大学		齋木 由利	都市と農山漁村の共生・対流における都市住民の行動と農村資源の関係の分析	盛岡 通
大阪大学		佐野 祥一	転倒事故低減を目的とした3次元動作解析	泉 佳伸
大阪大学		白井 清兼	自治体が主導・支援するまちづくり学習の現状と課題に関する研究 -近畿圏を対象にして-	澤木 昌典
大阪大学		須藤 久宜	輸送理論に基づく高速炉におけるナトリウムボイド反応度の感度解析	竹田 敏一
大阪大学		瀬尾 浩平	アルミニウム合金レーザ分別手法の適用性向上	竹本 正
大阪大学		園山 紘明	運動量入射によるトカマクプラズマの挙動解析	堀池 寛
大阪大学		高田 洋輔	環境共生型デザインにおける表現と3DCG動画手法の開発	福田 知弘
大阪大学		高濱 央人	液体リチウムジェット流の自由表面形状の直接計測	堀池 寛
大阪大学		高谷 紘史	高速炉における3次元6角非均質輸送計算法の開発と増殖比評価	竹田 敏一
大阪大学		武本 将	フェムト秒パルスラジオリシスのための等価速度分光システムの開発	吉田 陽一
大阪大学		津田 智行	オントロジー工学的手法及びデータマイニング法を用いた環境問題解決の為の知の構造化 -音環境を対象として-	桑野 園子
大阪大学		寺嶋 孝典	VR・ブログを用いた住民参加型広場デザインの手法の開発	福田 知弘

修士論文

大阪大学		中畑 雄介	フォトニックフラクタルの構造設計と電磁波環境制御に関する研究	宮本 欽生
大阪大学		永井 宏之	Research on thermoelectric materials with La2O3 structure	山中 伸介
大阪大学		二浦尾 友佳子	大阪府域を対象としたヒートアイランド現象によるインパクトの評価	水野 稔
大阪大学		西川 雅清	液体金属鉛ビスマス熱交換器における流動熱伝達特性の研究	堀池 寛
大阪大学		橋本 庸平	ジメチルスルホキシド廃水の生物処理に関わる分解微生物の挙動及び特性の解析	池 道彦
大阪大学		長谷川 直紀	回転磁場によるFRC平衡形成に関する研究	岡田 成文
大阪大学		羽原 勝也	大阪府域を対象とした都市平熱化に関する研究	水野 稔
大阪大学		原 昇司	Sphingomonas yanoikuyae FM-2によるビスフェノールFの分解特性および分解経路	池 道彦
大阪大学		原田 浩司	空調システムマネジメント用シミュレーションモデルに関する研究 -実建物を対象とする考察-	水野 稔
大阪大学		日置 賢	微生物電池による有機性排水からの電気エネルギー回収に関する研究	池 道彦
大阪大学		枇榔 智也	極端紫外(EUV)光源開発に於けるターゲット供給及び放射特性に関する研究	乗松 孝好
大阪大学		福島 聖威	環境中のPFOS濃度を説明する因子のマクロ分析	盛岡 通
大阪大学		二神 茉莉子	地区レベルの計画に位置づけられた都市農村交流に関する研究-神戸市北区西区を事例に-	澤木 昌典
大阪大学		松井 久恵	下廃水再利用システムへの高度処理の活用に伴う安全性評価に関する基礎的研究	池 道彦
大阪大学		松永 祐紀	ウキクサ根圏から分離した新規ノニルフェノール分解菌による各種アルキルフェノールの分解	池 道彦
大阪大学		三上 紗弥	金属ファイバーの改善による導電性接着剤の電気的信頼性向上	竹本 正
大阪大学		溝口 典仁	成熟度モデルを利用した組織のリスクマネジメント診断ツールの開発	盛岡 通
大阪大学		宗 哲也	カスプ磁場中での電子の分布関数と減速特性	堀池 寛
大阪大学		村山 紘之	熱対策機能屋根の熱特性測定とモデルによる熱収支解析	町村 尚
大阪大学		森谷 浩典	動的制御棒価値測定法の補正に対する理論的研究	竹田 敏一
大阪大学		山崎 祐二	環境浄化を目的として土壌中に導入した遺伝子組換え微生物の挙動およびそれに伴う土着微生物群への影響	池 道彦
大阪大学		若宮 愛	河川管理用地からみる大阪都心部の沿川空間の使われ方に関する研究	澤木 昌典
大阪大学		RAFIF MOHAMMAD JAFAR ALZUBI	Study on the changes of Historical old houses and their owners' lives in Salt city in Jordan.	澤木 昌典
大阪大学		SHRESTHA KUNDAN LAL	Coupling and evaluating MM5 and RAMS meteorological models with CMAQ air quality model for better assessment of air pollutants	近藤 明
大阪大学		孫 傑	乳幼児の匍匐による床上粉塵吸入量評価実験	加賀 昭和
大阪大学		玉 千峰	クロロエチレン類の嫌気生分解に関与する微生物の検出とその分解過程における挙動の解析	池 道彦
大阪大学		NOPPASAN MUANSANG	タイにおけるバイオディーゼル燃料の生産可能量の推計	盛岡 通
岡山大学	環境学研究科・生命環境学専攻	岡崎 系祐	「細胞酸化を指標としたハイスループット毒性試験の開発に関する研究」	青山 勲
岡山大学	環境学研究科・生命環境学専攻	吉岡 篤史	「エストロゲン様物質の構造活性相関」	青山 勲
岡山大学	環境学研究科・生命環境学専攻	藤原 拓洋	「有害化学物質の植物に及ぼす毒性評価のための各種エンドポイントの比較学的研究」	青山 勲
岡山大学	環境学研究科・生命環境学専攻	馬場 美衣	「医療廃棄物中間処理残渣の安全性評価に関する研究」	青山 勲
山口大学		福山 博之	榎野川流域における土壌流出解析に関する研究	浮田 正夫
山口大学		神崎 麻純	魚の移動に対する水中音の影響に関する研究	関根 雅彦
山口大学		江藤 貴子	廃水処理系への窒素・リン負荷低減機能を備えた汚泥減量化プロセスの構築と評価	今井 剛
山口大学		谷 公輔	水の液膜と空気との接触による新規酸素供給法の開発に関する研究	今井 剛
山口大学		新名 隆博	高濃度気体溶解水を用いた微生物の活性制御に関する研究	今井 剛
山口大学		吉田 健一	亜臨界水処理後の余剰汚泥における嫌気的生分解特性に関する研究	今井 剛
山口大学		若林 大嗣	砕砂研磨濁水処理における凝集剤の選定とその固液分離方法に関する研究	今井 剛
北九州市立大学	国際環境工学部	渡辺 祥夫	持続可能なコミュニティ形成のためのマネジメントシステムに関する実践的研究	松本 亨
九州大学		宮下 祥子	GISを利用した有明海の水環境変動特性の解析	小松 利光
九州大学		石川 泰助	支川合流の影響を組み込んだ河川感潮域の鉛直2次元流動モデルの構築- 一番匠川感潮域を対象として -	小松 利光

修士論文

九州大学		大淵 義剛	水俣湾における微量残留水銀の動態に関する研究	小松 利光
九州大学		岡村 聡	都市の道路アセットマネジメントにおける土石系循環資源利用の適正化に関する研究	島岡 隆行
九州大学		村上 明子	環境に配慮した住宅・設備の資産額算定方法に関する研究	島岡 隆行
九州大学		上田 晋也	有明海底質重金属の分布特性と生物影響	久場 隆広
九州大学		郡山 健	有収水率向上に着目した水道整備過程の比較研究 —民営化後のマニラ首都圏水道と戦後の福岡市水道の事例から—	神野 健二 広城 吉成
九州大学		小原 直樹	海岸帯水層における揚水に伴う塩水侵入の予測モデル開発	神野 健二 広城 吉成
九州大学		梅崎フアビオ	CONCENTRATION AND CHEMICAL CHARACTERISTICS OF HUMIC SUBSTANCES IN LEACHATE FROM A LANDFILL MAINLY DISPOSED WITH MSWI RESIDUES	島岡 隆行
九州大学		竹本 智典	都市ごみ焼却灰における塩素化合物の消長メカニズムに関する基礎的研究	島岡 隆行
九州大学		遠藤 伸一	Prediction of heavy rainfalls during the rainy season in Japan	神野 健二 広城 吉成
九州大学		杉町 仁美	港湾域における底泥中の有機スズ濃度低減のための陸上処理工法に関する研究	神野 健二 広城 吉成
九州大学		邊見 充	中国・渭河の自浄能力に寄与する懸濁物質の機能に関する研究	久場 隆広
九州大学		外尾 史恵	活性汚泥モデルを用いた高度下水処理システムにおける運転条件の検討	久場 隆広
九州大学		山平 未来	西日本における梅雨期の降雨および気象場特性に関する考察	神野 健二 広城 吉成
九州大学		与賀田 隆史	黄河流域の効果的水資源配分の検討	久場 隆広
九州大学		Perera Duminda	3-Dimensional Density dependant Solute Transport Model to Simulate Saltwater Intrusion in Motooka Area, Fukuoka, Japan.	神野 健二 広城 吉成
佐賀大学	工学系研究科都市工学専攻	小野 盛一	有明海湾奥干潟域における懸濁物輸送と粗朶撈工による細粒分捕捉効果に関する研究	荒木・山西・古賀
佐賀大学	工学系研究科都市工学専攻	古賀 康之	自動昇降型水質装置を用いた水質の空間分布及び物質輸送特性に関する研究	山西・荒木・古賀
佐賀大学	工学系研究科都市工学専攻	日村 健一	有明海湾奥部の泥干潟における懸濁物質の動態と物質変換に関する基礎的研究	山西・荒木・古賀
佐賀大学	工学系研究科都市工学専攻	松下 睦	リン除去能を付加した発泡廃ガラスの開発に関する基礎的研究	荒木・山西・古賀
熊本大学	自然科学研究科環境土木工学専攻	稲富 泰彦	Anammoxリアクタのバイオガスプラント脱離液処理への適用	
熊本大学	自然科学研究科環境土木工学専攻	檜原 雄一郎	SNAP処理に及ぼす運転影響因子の検討	
熊本大学	自然科学研究科環境土木工学専攻	河野 洋平	Anammoxグラニュールを活用するCANNON法の影響因子の検討	
熊本大学	自然科学研究科環境土木工学専攻	秦 浩平	Anammoxリアクタの早期立上げとその影響因子の検討	
熊本大学	自然科学研究科環境土木工学専攻	寶満 隼人	SNAPを活用した埋立地浸出水の窒素除去	
熊本大学	自然科学研究科環境土木工学専攻	Luong Ngoc Khanh	Anammox汚泥の培養に適用する担体の比較検討	
公立				
前橋工科大学	工学研究科・建設工学専攻	河合真由美	白丸調整池ダムのフラッシング排砂に伴うSS・濁度の流出変動と河床の生息環境への影響	土屋十閑
前橋工科大学	工学研究科・建設工学専攻	砂口真澄	都市域の雨水排水区を対象とした内水氾濫の再現計算と局地豪雨による氾濫予測に関する研究	土屋十閑
前橋工科大学	工学研究科・建設工学専攻	西尾敏和	近代化産業遺産としての旧福岡製糸場の評価に関する研究	湯沢昭
前橋工科大学	工学研究科・建設工学専攻		防犯自己診断システムによる防犯まちづくりに関する研究	湯沢昭

卒業論文

大学名	学科・専攻名	著者名	題 目	指導教授 あるいは主宰
国立				
北海道大学	環境計画研究室	秋山 英慶	道路面の太陽熱エネルギーによる熱電発電に関する検討	
北海道大学	環境計画研究室	野津 晋一	湿性沈着イオン濃度のトレンドモデルの評価	
北海道大学	環境計画研究室	山岸 圭太	騒音伝搬に及ぼす風及び積雪の影響	
北海道大学	廃棄物処分工学研究室	井上 由子	自治体における災害廃棄物の発生・処理の事例分析	
北海道大学	廃棄物処分工学研究室	佐藤 昌弘	安定化推進工事中の都市ごみ埋立地における水分移動状況の推定	
北海道大学	廃棄物処分工学研究室	新堀 愛	有機性廃棄物の分解における腐植物質生成に関する基礎的研究	
北海道大学	廃棄物処分工学研究室	柳川 幸生	使用済みパソコンの回収フロー推定	
北海道大学	廃棄物処分工学研究室	横野 小百合	カーシュレッダーダストの燃料利用のための前処理プロセスに関する研究	
北海道大学	大気環境保全工学研究室	市原 健一郎	日本における大気混濁係数と全天日射量の推移	
北海道大学	大気環境保全工学研究室	大高 涼子	積分球を用いた大気エアロゾルの吸収係数および黒色純炭素濃度の測定法の検討	
北海道大学	大気環境保全工学研究室	真田 あすみ	疫学データを利用したわが国の粒子状大気汚染の健康影響評価	
北海道大学	大気環境保全工学研究室	辺見 圭祐	札幌における大気エアロゾルの連続観測と時間変動要因の検討	
北海道大学	大気環境保全工学研究室	水谷 航太	農作物非可食部バイオマスの蒸気エンジンをを用いた発電と排出ガス評価	
北海道大学	大気環境保全工学研究室	山下 智生	PMF(Positive Matrix Factorization)法を用いた日本の降水化学データの解析	
北海道大学	環境リスク工学研究室	小泓 誠	原水濁度及び膜ファウリングが凝集MF膜によるウイルス除去に与える影響	
北海道大学	環境リスク工学研究室	佐々木 洋志	活性炭の微粉化によるジェオスミン除去性の向上	
北海道大学	環境リスク工学研究室	白鳥 良樹	塩素による有機リン系農薬等の酸化と活性炭からの脱着	
北海道大学	環境リスク工学研究室	長谷川 広樹	超微粉化活性炭添加がセラミック膜ろ過性に及ぼす影響	
北海道大学	環境リスク工学研究室	日根野谷 充	NF濃縮水の凝集・活性炭による処理性	
北海道大学	循環システム研究室	大塚 美夏	不法投棄現場修復のためのテトラクロロエチレン嫌気性微生物分解とその影響因子に関する研究	
北海道大学	循環システム研究室	佐藤 剛	生ごみバイオガス化・有料化導入効果の評価のためのシステム分析	
北海道大学	循環システム研究室	佐藤 直生	ANP手法を用いた廃棄物管理の広域化システム評価	
北海道大学	循環システム研究室	杉本 知輝	不法投棄廃棄物のバイオガス化検討のためのメタン発生量と残渣性状の実験的考察	
北海道大学	循環システム研究室	玉田 昭太郎	有機系廃棄物のバイオガス発生量評価手法の検討ー一回分実験における種汚泥の影響と有機物分解率の考察ー	
北海道大学	水質変換工学研究室	大澤 将人	ヒトDNAチップを用いたAgナノ粒子の毒性評価のための遺伝子発現解析	
北海道大学	水質変換工学研究室	坂井田 健司	食品廃棄物からのポリヒドロキシン酪酸の生産	
北海道大学	水質変換工学研究室	谷内 亜沙美	大腸菌における菌密度依存的RelEトキシン感受性に関する研究	
北海道大学	水質変換工学研究室	高橋 慶考	ステップ流入式上向流型ANAMMOXリアクターにおける処理性評価	
北海道大学	水質変換工学研究室	大給 理江	MBRの運転条件と膜ファウリング物質特性の関連性	
北海道大学	水質変換工学研究室	西迫 里恵	仕切り板挿入型MBRを用いた都市下水からの栄養塩除去	
北海道大学	サニテーション工学研究室	喜多 修介	MBR-NF/RO膜を用いた都市下水からの中性医薬品の除去	
北海道大学	サニテーション工学研究室	鈴木 菜津	微生物燃料電池を用いた都市下水からのエネルギー回収に関する基礎的検討	
北海道大学	サニテーション工学研究室	中島 正司	台所・洗濯排水処理用MBRの有機物負荷に関する検討	
北海道大学	サニテーション工学研究室	橋本 悠美	コンポストの温度分布が病原リスクに与える影響	
北海道大学	サニテーション工学研究室	松尾 紀子	気候および運転条件がコンポスト型トイレのエネルギー消費構造に与える影響	
北海道大学	水環境保全工学研究室	今西 正義	雨天時における都市流出水中の重金属の汚濁負荷と流出挙動	
北海道大学	水環境保全工学研究室	笠原 かおり	温泉排水中のヒ素の制御 ー下水汚泥からの溶出低減ー	
北海道大学	水環境保全工学研究室	口町 紗英子	中央カリマンタン・パラナカラヤ地区の熱帯泥炭地における水質環境と環境保全	
北海道大学	水環境保全工学研究室	岡野 瑛大	中央ベトナム・フエ市ホーン川水系の水質と人為的汚染	
北海道大学	水環境保全工学研究室	中島 篤	天塩研究林における森林土壌中の金属成分に関する研究	
北海道大学	水環境保全工学研究室	渡辺 真吾	下水中重金属の除去 ー嫌気性処理と好気性処理の組み合わせー	
北海道大学	環境人間工学研究室	奥邨 大輔	医療福祉施設における室内微生物汚染の制御に関する検討	



卒業論文

北海道大学	環境人間工学研究室	川崎 直人	発汗量調節に関する被験者実験とその解析	
北海道大学	環境人間工学研究室	佐藤 麻希	東アジア地域の都市部における子供の発育の現状と生活様式に関する測定調査とその解析	
北海道大学	環境人間工学研究室	高野 龍太郎	室内空気質の評価・制御シミュレータの開発 一空間シミュレーションルームでの実測とプログラムの開発一	
北海道大学	環境人間工学研究室	豊島 悠輝	閉鎖生態系生命維持システムにおける環境人間工学研究	
北海道大学	環境人間工学研究室	森本 将平	高齢者の生体機能に関するデータベース化とその解析	
北海道大学	環境システム工学研究室	岡崎 直美	北海道産天然多孔材料を用いた水中VOCの吸着剤開発	
北海道大学	環境システム工学研究室	岡部 聡太	潜熱蓄熱材と調湿材を利用した潜熱・顕熱分離空調に関する検討	
北海道大学	環境システム工学研究室	笠原 敬太	地域連携による雪氷冷熱エネルギーの複合利用モデルに関する研究	
北海道大学	環境システム工学研究室	田竈 秀俊	寒冷地における住宅用コージェネレーションシステムの導入可能性評価	
北海道大学	環境システム工学研究室	永廣 健太郎	建築・都市の環境工学的診断と数値情報システム	
北海道大学	環境システム工学研究室	堀 彰吾	地中熱源ヒートポンプシステムが導入された建物のコミッションング	
東北大学		金澤 拓大	濃縮余剰汚泥の嫌気性消化に及ぼす消化温度と前熱処理の影響	李 玉友
東北大学		林 諒一	高温水素発酵における微生物叢の解析	李 玉友
東北大学		渡辺 悠介	DHSリアクターによる無曝気・省エネルギー方式の高負荷硝化プロセスの開発	原田 秀樹
東北大学		佐川 正浩	高温好気処理法における環境因子の変化が微生物活性に及ぼす影響	西村 修
東北大学		熊谷 翼	未利用海藻廃棄物を用いた重金属吸着除去剤の製作とその評価	中野 和典
東北大学		千野 貴彦	オゾンー生物処理法を用いた埋立地侵出水の処理特性	西村 修
東北大学		石藤 慎吾	アルミニウム錯体形成能を有するMicrocystis aeruginosa由来ペプチドの遺伝子分離	大村 達夫
東北大学		伊藤 紘晃	競合リガンド法を用いた沿岸域における有機鉄錯体の解離機構の解明	大村 達夫
東北大学		西牧 宏尚	ノロウイルスの水環境中動態解明を目的としたカプシドタンパク質の合成	大村 達夫
岩手大学	工学部・建設環境工学科	後藤 祐輝、 島山 浩二	宮守川における流下及び河床内の粒状有機物が水生昆虫相に与える影響	海田・伊藤
岩手大学	工学部・建設環境工学科	佐藤 雄大	過酸化水素を用いた下水汚泥中重金属の溶出に及ぼす鉄イオン添加の効果	海田・伊藤
岩手大学	工学部・建設環境工学科	佐藤 洋平	生物酸化と共沈を組み合わせる方法による下水中ヒ素の除去に関する基礎的研究	海田・伊藤
岩手大学	工学部・建設環境工学科	鈴木 貴之	空気供給型圧送式下水管路内での硫化物生成に及ぼすポンプ運転条件の影響	海田・伊藤
岩手大学	工学部・建設環境工学科	高橋 聡	Al加水分解生成物存在下での付着珪藻の死滅速度に及ぼす硬度成分の影響	海田・伊藤
岩手大学	工学部・建設環境工学科	富沢 綾子	光触媒による藍藻の不活化に関する研究	海田・伊藤
岩手大学	工学部・建設環境工学科	盧 孝斌	貯水池における底質からのMnの溶出特性に関する研究	海田・伊藤
岩手大学	工学部・建設環境工学科	矢吹 護	酸化剤による下水汚泥からの重金属の溶出に及ぼすpHの影響	海田・伊藤
岩手大学	工学部・建設環境工学科	熊野 裕也	活性汚泥へのヒ素の収着特性に関する研究	海田・伊藤
東京大学	工学部都市工学科	石飛 勝也	高濃度粉末末活性炭添加MF (PAC-MF) 膜処理システムにおける膜ファウリングに関する研究	滝沢 智
東京大学	工学部都市工学科	大野 皓史	バイオマス炭化物を用いたアルカリ型燃料電池の開発に関する基礎的研究	山本 和夫 福士 謙介 中島 典之
東京大学	工学部都市工学科	川嶋 清源	インドネシア共和国メダン市における水利用・水環境の実態についての調査研究	古米 弘明 栗栖 太
東京大学	工学部都市工学科	近藤 光佳	標準活性汚泥法における有機性一時貯蔵物質の挙動	味埜 俊 佐藤 弘泰
東京大学	工学部都市工学科	園田 隼也	超長期シナリオに基づく廃木材を利用したバイオエタノール製造ポテンシャルの地域別評価	花木 啓祐 荒巻 俊也 栗栖 聖

卒業論文

東京大学	工学部都市工学科	高階 峰人	亜熱帯植物種を用いたコメットアッセイによるバンコク市街地大気汚染モニタリングへの適用可能性	山本 和夫 富士 謙介 中島 典之
東京大学	工学部都市工学科	中垣 宏隆	高度浄水処理における生物活性炭の硝化能評価と硝化微生物群の多様性解析	古米 弘明 栗栖 太
東京大学	工学部都市工学科	Hoang Thi Mai	ヒ素を含有する上水汚泥の有害性の検討～ベトナム・ハノイ市の持続的で安全な水管理の提案	山本 和夫 富士 謙介 中島 典之
東京大学	工学部都市工学科	松澤 朝子	植物葉中ピレンおよび1-OHピレンの分析を目的としたグリーンナップ法の検討	花木 啓祐 荒巻 俊也 栗栖 聖
東京大学	工学部都市工学科	松村 修平	ダクタイル水道管モルタルライニングの中性化による水質への影響	滝沢 智
東京大学	工学部都市工学科	松本 一城	東京湾流域の下水処理場を対象とした排出権取引と課徴金制度の導入効果の評価	花木 啓祐 荒巻 俊也 栗栖 聖
東京大学	工学部都市工学科	松森 克人	大腸菌の光回復に及ぼす銀イオンの影響	大垣 眞一郎 片山 浩之
東京大学	工学部都市工学科	水谷 司	合流式下水管渠生物膜の雨天時流出機構に関する実験室モデル下水管を用いた検討	味埜 俊 佐藤 弘泰
新潟大学	工学部建設学科社会基盤工学コース	安生 真人	新潟県における水道水中の消毒副生成物の現状について	高橋 敬雄
新潟大学	工学部建設学科社会基盤工学コース	後藤 佑介	多成分一斉分析による水・土壌中の農薬の分析と挙動について	高橋 敬雄
新潟大学	工学部建設学科社会基盤工学コース	徳竹 知美	水道水中の変異原性に関する研究	高橋 敬雄
新潟大学	工学部建設学科社会基盤工学コース	藤原 祐美	新潟市の地下水水質について	高橋 敬雄
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	飯島 太郎	航空機騒音の評価尺度の妥当性に関する研究-住民反応調査に基づく検証-	内山 巖雄
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	石川 卓	水道水源と浄水処理過程におけるエンドトキシンの挙動とシアノバクテリアの寄与に関する研究	伊藤 禎彦
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	岩見 祥男	二枚貝を用いた大阪湾でのPCB汚染の分布特性に関する研究	津野 洋
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	上門 卓矢	雨天時下水の活性汚泥処理に関する基礎的研究	田中 宏明
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	岡 宏宣	大学等における環境報告書のデータベース化及び考察	酒井 伸一
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	尾坂 高明	ある都市における接触曝露可能な重金属の分布とそのリスク評価	森澤 眞輔
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	小原 慎也	臭素酸生成抑制条件下での臭気物質除去のためのオゾン/過酸化水素処理の操作条件	津野 洋
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	梶井 洋志	全世界における鉄のマテリアルフローに関する研究	松岡 譲
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	北神 理紗子	環境中鉛による幼児・小児の健康リスク評価	森澤 眞輔
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	木村 功二	有機フッ素化合物PFOS・PFOAの活性炭における吸着特性の検討	藤井 滋穂
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	合田 意	家計調査を用いた世帯属性と環境負荷発生量の係わりに関する研究	松岡 譲
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	佐々木 克典	ヒト正常骨髄細胞を用いたベンゼン誘発白血病リスク評価指標に関する研究	森澤 眞輔
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	佐々田 圭晃	不飽和アルデヒドが形成するdG付加体のLC/MS/MSによる同時定量法の確立	松井 三郎
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	佐藤 俊一	臭素系難燃剤含有廃プラスチックに着目したテレビバックカバーの各処理方法に対するLCA評価	酒井 伸一
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	佐藤 直己	家庭製品に焦点を当てた鉛の物質フロー解析及びその制御策の検討	酒井 伸一
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	篠田 祐介	淡水中における有害物質生成藻類の増殖特性に関する基礎的研究	津野 洋
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	杉下 寛	樹医薬品の淀川水系における存在実態と水生生物への影響に関する研究	田中 宏明
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	鈴木 陽子	シロイヌナズナにおける重金属吸収特性と生体影響に関する検討	森澤 眞輔
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	宅和 雄也	埋立地ガス中の微量成分に関する調査研究	武田 信生
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	谷野 佑太	模擬飛灰でのダイオキシン類生成における重金属塩化物間の相互作用	武田 信生
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	千阪 尚史	蛍光X線分析法による嗅覚系ニューロンを介したディーゼル排出ナノ粒子の曝露経路の検索	内山 巖雄
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	中島 祐輔	液化ジメチルエーテルを用いた下水汚泥脱水方法の基礎検討	武田 信生

卒業論文

京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	長山 友祐	アジア地域における農業・畜産業からの環境負荷物質の排出量推計に関する研究	松岡 譲
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	西村 勇亮	焼却灰焼成時のクロムの挙動に関する基礎的検討	武田 信生
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	西 隆平	石油化学産業複合廃水処理水中に存在する多環芳香族受容体(AhR)リガンドの探索	松井 三郎
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	畑田 宏	都市ごみ焼却灰のセメントリサイクル事業におけるエージェントベースモデルの統計的分析	松井 三郎
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	福島 智之	主観情報を考慮した最適モニタリング地点決定法の開発	森澤 眞輔
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	古澤 彰太	臭化物イオン除去を目的としたハイドロタルサイト様化合物の固液分離特性向上に関する研究	伊藤 禎彦
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	古川 哲己	音環境評価における音源種別を考慮した物理計測の試み	内山 巖雄
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	政井 謙介	技術進歩を考慮した世界のCO2排出削減量に関する研究	松岡 譲
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	明神 大也	日本のアスベスト対策と中皮腫死亡の将来予測に関する検討	内山 巖雄
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	村上 佳菜	京都市における観光客の輸送に伴う環境負荷量の推計	東野 達
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	森安 洋平	ごみ有料化施策がごみ減量化と住民意識・行動に与える影響に関する考察-京都市での導入前後比較と自治体間の比較から-	酒井 伸一
京都大学	工学部地球工学科環境工学コース	矢野 順也	廃食用油をはじめとする京都バイオマス有効利用シナリオのLCA評価	酒井 伸一
京都大学	工学部地球工学科土木工学コース	宮崎 匠	焼却灰を埋め立てた海面処分場の重金属の安定性	嘉門 雅史
大阪大学		部谷 桂太朗	淀川流域圏における生物多様性評価指標の検討	町村 尚
大阪大学		有城 丈博	豊中市における地球温暖化対策シナリオに関する研究	水野 稔
大阪大学		梅田 絵里子	楽輪-Raku Loop-	澤木 昌典
大阪大学		江頭 孝	森林管理シナリオによる淀川流域圏の生物多様性の将来予測	町村 尚
大阪大学		大橋 弘樹	マンション住民と地域住民の付き合いに関する研究	澤木 昌典
大阪大学		廉林 篤	大阪府域を対象としたヒートアイランド現象の健康影響に関する研究	水野 稔
大阪大学		金子 勝	ミリ波制御用フォトニック結晶の作製と電磁波特性	宮本 欽生
大阪大学		金田 匡彦	ミスト散布による都市熱環境緩和効果の実証に関する研究	水野 稔
大阪大学		久保 洋昭	淀川流域圏WEB-GISを活用した環境教育	加賀 研
大阪大学		黒崎 知子	古写真に基づく日本の街路景観の評価	澤木 昌典
大阪大学		斉藤 真哉	CFDを用いた熱源機器の局所環境影響評価	加賀 研
大阪大学		山王 大介	銅粉末分散マイクロフォトニックフラクタルの創製と電磁波特性	宮本 欽生
大阪大学		嶋寺 光	淀川流域圏における酸性物質沈着量の評価	加賀 研
大阪大学		瀬戸 文久	MM5-CMAQを用いた平日/休日間のオゾン濃度の違いの検討	加賀 研
大阪大学		照井 奈都	3次元都市熱環境評価モデルを用いた過去の都市熱環境に関する再現と各種検討	水野 稔
大阪大学		梅野 良枝	BEMSにおけるデータクレンジングに関する研究 ~ある空気冷却器における考察~	水野 稔
大阪大学		中久保 豊彦	中国農村部の経済発展に応じたバイオマス利用の高度化による農村発展モデルの構築	盛岡 通
大阪大学		中間 公規	水環境中における環境レチノイド汚染の実態解明に関する基礎的検討	池 道彦
大阪大学		永野 公太	Bacillus selenatarsenatis SF-1の亜セレン酸還元に関与する遺伝子の解析	池 道彦
大阪大学		西村 善博	木屋町トライアングル(卒業設計)	福田 知弘
大阪大学		西本 絵梨子	大気中石綿濃度測定のための自動計数システムの構築	加賀 昭和
大阪大学		野田口 恵美	新規好気性セレン酸塩還元菌の分離と特徴づけ	池 道彦
大阪大学		平井 陽	反転現象	澤木 昌典
大阪大学		前田 直人	来訪者の増加が小集落の持続性に及ぼす影響	澤木 昌典
大阪大学		松浦 洋平	大学生に対する体験型環境教育の効果把握~万博記念公園での資源循環型の公園づくりを事例として~	盛岡 通
大阪大学		松原 礼子	持続可能な都市論に関する概念整理-コンセプトマップ手法の適用と活用へ向けての基礎的考察-	盛岡 通
大阪大学		三木 康功	鉛フリーはんだバンプ衝撃試験方法の検討	竹本 正
大阪大学		宮本 浩明	交錯する水と緑 ~茨木市中心部の快適な歩行空間を目指して~(卒業設計)	福田 知弘
大阪大学		桃谷 尚憲	ウキクサ根圏から分離した新規ノニルフェノール分解菌の特徴づけ	池 道彦
大阪大学		山岸 明日香	キョウカイ	澤木 昌典

## 卒業論文

大阪大学		山口 幸男	エネルギー最終需要モデルを用いた全国20都市の家庭用エネルギー増加要因の解析	水野 稔
大阪大学		山田 洋平	東シベリアのカラマツ林における生態系炭素収支の気候応答特性	町村 尚
大阪大学		山本 尚生	中山間地域の若い農業者を支える人のつながりに関する研究 ～鳥取県旧八頭郡におけるヒアリング調査を通して～	澤木 昌典
大阪大学		山本 勇太	3DMWによるニッケル基超合金の自由造形に関する研究	宮本 欽生
大阪大学		藤田 剛士	棄てられた島の遺言 -長崎県端島を対象として-(卒業設計)	福田 知弘
大阪大学		横井 隆志	廃棄物処理施設を拠点とした地域エネルギー供給の発達によるCO2排出量削減効果分析モデルの構築～横浜市金沢区を事例として～	盛岡 通
大阪大学		横田 真樹	地域に対する意識向上支援システムの構築(卒業論文)	福田 知弘
大阪大学		脇光 博紀	みち×図書館 ～旧草津川廃川跡地利用計画～	澤木 昌典
大阪大学		WONGPIROM SARN KRIT	Pd基金属ガラスのはんだ付性と反応界面微細組織観察	竹本 正
大阪大学		張 煜	上海民生部門におけるエネルギー需要の将来予測及び温暖化対策によるCO2排出量削減効果のマクロ分析	盛岡 通
大阪大学		WEI XIAO YE	anammox反応を組み込んだ廃水処理プロセスのモデル化	池 道彦
山口大学		小川 淳史	榎野川流域における微細土粒子の流出に関する研究	浮田 正夫
山口大学		村上 隆英	ミネラルリサイクルに関する基礎的研究	浮田 正夫
山口大学		西 健介	環境中の鉄・フミン物質の存在実態とその役割に関する研究	浮田 正夫
山口大学		浜口 真弥	セメント製造工程での臭気発生に関する研究	樋口 隆哉
山口大学		望月 未来	臨海工場群から発生する悪臭の動向及び嗅覚測定法の精度に関する研究	樋口 隆哉
山口大学		井ノ上 慶祐	榎野川堤外地ホタル水路の改良に関する研究	関根 雅彦
山口大学		今中 大康	水中音に対するアユの選好性の実験的解析	関根 雅彦
山口大学		中村 健志	環境選好性に基づく河川の魚ののぼりやすさ評価のための実験的研究	関根 雅彦
山口大学		中村 良一	室内実験による環境保全型ブロックの魚類保全効果の検討	関根 雅彦
山口大学		萩原 淳子	アザリ保護放流実験に基づく干潟再生事業の効果の検討	関根 雅彦
山口大学		吉田 明	環境保全型ブロックとその他の河岸形態の魚類保全効果の比較	関根 雅彦
山口大学		佐藤 知里	人工染料由来の着色廃水の生物学的脱色に関する研究	今井 剛
山口大学		白石 和也	ダム湖における高濃度酸素水の導入・拡散にともなう水質改善に関する研究	今井 剛
山口大学		長尾 航	酵母発酵廃液の液肥としての肥料効果と施肥方法に関する研究	今井 剛
山口大学		福永 尚昊	高濃度空気溶解水の微生物に及ぼす殺菌効果の検討	今井 剛
山口大学		古里 研吾	余剰汚泥減量化プロセスにおける溶解性有機炭素の蓄積に関する研究	今井 剛
山口大学		森田 起生	硫酸塩還元菌によるメタン生成菌への阻害に対する適正酸素導入量の検討	今井 剛
九州大学		小林 直広	球状ベントナイトの埋立地底面遮水工適用に向けた環境地盤性能評価に関する研究	島岡 隆行
九州大学		武田 宜紘	BaNKシステムによる残差流生成特性の実験的検討	小松 利光
九州大学		寺尾 直樹	流木による河道閉塞に対する防止技術の基礎実験	小松 利光
九州大学		黨 秀治郎	大山川における維持流量増加が付着藻類に与える影響	小松 利光
九州大学		房崎 真人	納豆菌群を封入したコンクリートブロックの循環水路内における水質浄化能力の検討	小松 利光
九州大学		宮原 明子	筑後川から有明海に流入した淡水の挙動に関する現地観測	小松 利光
九州大学		井料 隆太	大気成層状態と降雨特性との関連性について	神野 健二 広城 吉成
九州大学		王 媚	都市ごみ焼却灰の水冷に伴う物性及び重金属溶出特性の変化に関する研究	島岡 隆行
九州大学		大部 浩貴	九州大学新キャンパスにおける空隙貯留浸透施設の効果的な配置について	神野 健二 広城 吉成
九州大学		小田 圭太	酸化還元状況下における鉄-ヒ素の吸脱着について	神野 健二 広城 吉成

## 卒業論文

九州大学		甲木 守	分布型地下水涵養モデルを用いた地下水流出量の推定	神野 健二 広城 吉成
九州大学		坂田 峻祐	有明海におけるカキの成分特性	久場 隆広
九州大学		鳥屋尾 啓太	シクロデキストリンによる17β-エストラジオールの包接とエストロゲン活性の抑制	久場 隆広
九州大学		長野 貴之	都市ごみ焼却灰セメント原料化のためのコンポストを利用した脱塩素に関する研究	島岡 隆行
九州大学		永淵 慶彦	高度下水処理における窒素・リン同時除去細菌の高濃度集積および単離の試み	久場 隆広
九州大学		中村 圭一	嫌気-無酸素回分式活性汚泥の代謝活性及び微生物群集構造の変化	久場 隆広
九州大学		原 英孝	北川感潮域におけるカワスナガニの生息分布と生息環境およびその保全に関する研究	久場 隆広
九州大学		伴野 雅之	都市化が進む中小河川水質に対する面源負荷の影響	久場 隆広
九州大学		福元 裕美	自己組織化マップによる梅雨期の成層状態の解析	神野 健二 広城 吉成
佐賀大学	理工学部都市工学科	石井 孝憲	3次元有限容積モデルによる有明海の塩分濃度計算	古賀 憲一
佐賀大学	理工学部都市工学科	大田 孝	有明海湾奥西部水域における水質の長期観測と酸素消費に関する研究	荒木 宏之 山西 博幸
佐賀大学	理工学部都市工学科	魚返 由香梨	2次元ダム水質モデルの開発に関する研究	古賀 憲一
佐賀大学	理工学部都市工学科	黒木 圭介	有明海における粗朶撈工の細粒分捕捉効果に関する現地調査	荒木 宏之 山西 博幸
佐賀大学	理工学部都市工学科	古賀 沙織	硝化菌共存下におけるゼオライト化発泡廃ガラスのアンモニア除去特性に関する基礎的研究	荒木 宏之 山西 博幸
佐賀大学	理工学部都市工学科	小林 和也	有明海湾奥部干潟域におけるアゲマキガイの生息選好性に関する研究	荒木 宏之 山西 博幸
佐賀大学	理工学部都市工学科	西村 陽介	筑後川下流域の塩分濃度に関する研究	古賀 憲一
佐賀大学	理工学部都市工学科	野口 潤二	干拓調整池の懸濁性物質の挙動に関する基礎的研究	古賀 憲一
佐賀大学	理工学部都市工学科	渡邊 千秋	発泡廃ガラスの底質改善効果に関する基礎的研究	荒木 宏之 山西 博幸
熊本大学	工学部環境システム工学科	高崎 暢哉	揺動床を用いた高濃度有機排水の処理	
熊本大学	工学部環境システム工学科	古賀 絢三	Anammoxリアクタのバイオガスプラント脱離液処理への適用に関する研究	
公立				
前橋工科大学	工学部・建設工学科	大槻 信貴	「生物学的脱窒における森林廃棄物等抽出リグニンの電子供与体としての有効性」	田中 恒夫
前橋工科大学	工学部・建設工学科	竹田 健司	「扇状地河川・石田川流域の水質・水文流出解析」	土屋 十圀 田中 恒夫
前橋工科大学	工学部・建設工学科	吉田 享史, 杉戸 千裕	「多孔質電極を用いる電気化学的消イオン・濃縮プロセスの研究開発」	田中 恒夫
北九州市立大学	国際環境工学部	勝原 英治	北九州エコタウン事業の総合的評価フレームの検討及び環境負荷削減効果の推計	松本 亨
北九州市立大学	国際環境工学部	松葉 仁志	北九州市マテリアルバランス表の作成とそれを用いた資源循環構造分析	松本 亨
北九州市立大学	国際環境工学部	谷村 勝弘	ライフサイクルシミュレーションを用いた自動車利用形態のシナリオ分析	松本 亨
北九州市立大学	国際環境工学部	藤岡 健介	自治体を対象とした廃棄物環境会計の検討と適用:福岡市を事例として	松本 亨
北九州市立大学	国際環境工学部	飯盛 章太郎	ストック再生・活用を想定した分散型エネルギーシステム導入効果の試算	松本 亨

環境工学教授協会 事務局

住 所

〒600-8815

京都市下京区中堂寺栗田町 93 京都リサーチパーク 4 号館 3 階 ITEC

(有) セクレタリー・オフィス・サービス内

E-mail : [jaeep-office@s-off.com](mailto:jaeep-office@s-off.com)

[jaeep-office@sec-off.com](mailto:jaeep-office@sec-off.com)

電話 : 075-323-4511

FAX : 075-323-4512

URL <http://www.s-off.com/member/jaeep/>